

縄文晩期併行期の奄美

西 谷 大

はじめに	3 土器群の分類と分析
1 研究の動向	4 土器群の編年と器種構成
2 遺跡の概要	5 器種構成変化の背景

論文要旨

本稿では、南西諸島中文化圏のトカラ列島と奄美大島の縄文晩期併行期をとりあげ、土器の編年をおこないつつ、器種構成を分析し、その変化の背景について考察する。

新たな土器分類を設定し、遺構または明確な文化層出土の土器群を使って編年することにより、この地域の縄文晩期併行期をⅠ期からⅢ期に編年した。さらにⅠ・Ⅱ期を前半と後半に分け、Ⅰ期前半を手広遺跡第13層土器群に、Ⅰ期後半をサモト遺跡Ⅲ層遺構土器群に、Ⅱ期前半をハンタ遺跡・タチバナ遺跡出土の土器群に、Ⅱ期後半を手広遺跡第11層・サモト遺跡Ⅱ層遺構土器群に、そしてⅢ期を手広遺跡第9層土器群に比定した。

各時期の器種構成の特徴は、以下の様相を示す。Ⅰ期前半は平底深鉢形土器主体の器種構成であり、Ⅰ期後半はⅠ期前半の器種構成の特徴を踏襲しながらも、尖底気味の丸底の器形と深鉢形土器に無文のものが出現する点で異なる。Ⅱ期前半は、深鉢形土器より小型丸底壺形土器主体の器種構成に変化し、いずれの器種も丸底化する。Ⅱ期後半の手広遺跡第11層では、小型丸底壺主体の器種構成を示すが、サモト遺跡Ⅱ層ではふたたび深鉢主体の器種構成を示すようになり、この傾向はⅢ期の手広遺跡第9層の土器群においても共通する。このようにⅠ期からⅡ期、そしてⅡ期からⅢ期に、器種構成が大きく変化したことが指摘できる。

Ⅱ期に、小型丸底壺形土器主体の器種構成が出現する背景には、遺跡立地の変化・定住化・食物加工用石器の増加が認められ、おそらくこの時期に生産基盤の上で前代と異なる大きな画期があり、それが土器文化に反映したと考えられる。壺形土器主体の器種組成を背景とする具体的な生活様式の内容と、なぜ短期間に再び深鉢主体の器種構成に変容するかという問題を解決することが、背景に存在するであろうこの時期の社会変動の要因を説明することにつながると考える。

はじめに

日本列島の南西海域、弧状に連なる大隅諸島から先島諸島の島嶼群を南西諸島と称する。この地域は一般にその文化的特徴から、種子・屋久島、薩南諸島を含めた北部圏、奄美・沖縄諸島および付近島嶼を含む中部圏、そして宮古・八重山諸島の南部圏という3つの文化圏にわけて論じられることが多い⁽¹⁾⁽²⁾。

近年、南西諸島先史時代の考古学的研究にはめざましいものがあり、具体的な各時代の様相も、文化圏ごとに徐々に把握できるようになってきた。本稿では、南西諸島の中でも歴史上独自の文化を形成してきた、中文化圏のトカラ列島と奄美大島の縄文晩期併行期をとりあげ、土器の編年と器種構成を再検討しつつ、その内的変化をさぐってみたい。

1 研究の動向

(1) 戦前の研究

南西諸島の先史時代の遺物を世に紹介したのは、1892年、種子島および屋久島で採集した遺物を、『人類学雑誌』に発表した若林勝邦が初めてである〔若林 1892〕。続いて佐藤伝蔵は「屋久島の石斧」を、やはり『人類学雑誌』に寄稿している〔佐藤 1896〕。南西諸島の考古学的な研究は、まず九州に近い南西諸島北部圏の考古学的遺物の紹介という形で始められた。

中・南部圏の調査は、1894年に鳥居龍蔵によって先鞭がつけられた〔鳥居 1894〕。彼は1904年に、沖縄と石垣島で本格的な遺跡踏査をおこない、石垣島では貝塚の試掘調査を実施している。そうして沖縄の先住民は、農耕栽培を知らない魚撈・採集を生業とする石器時代人であり、人種的にはアイヌ人であると考えた〔鳥居 1904〕。その後、松村瞭によって北中城村荻堂貝塚で、本格的な発掘調査が実施された。彼は、荻堂貝塚から出土した土器を、本土の縄文文化の系譜につながるものの独自の地域性も有していると考え、「琉球式」土器と名づけた〔松村 1920〕。続いて、1920年大山柏が石川市伊波貝塚の発掘調査をおこない、土器に関しては、九州に系譜を求めながらも、台湾とそれ以南の南方の文化とのつながりを暗示し、その研究の必要性を説いている〔大山 1922〕⁽³⁾。昭和に入ると、小牧実繁・西村真次・橋本増吉・金関丈夫らが那覇市城嶽貝塚を発掘調査した〔小牧他 1927〕。金関はこの遺跡から出土した人骨の大腿骨を分析し、日本の石器時代人との強い関連を指摘している〔金関 1929〕。また島田貞彦は崎樋川貝塚の発掘調査をおこなっている〔島田 1932〕。

一方、奄美諸島の考古学的調査は、沖縄諸島より遅れる。広瀬祐良・小原一夫・大村信行・大山柏らによって、1920年代終わりから30年代初めにかけておこなわれた、徳之島面縄貝塚の調査が端緒であろう⁽⁴⁾。大山は面縄貝塚出土の土器と沖縄の伊波・荻堂貝塚の土器を同系列のものと論

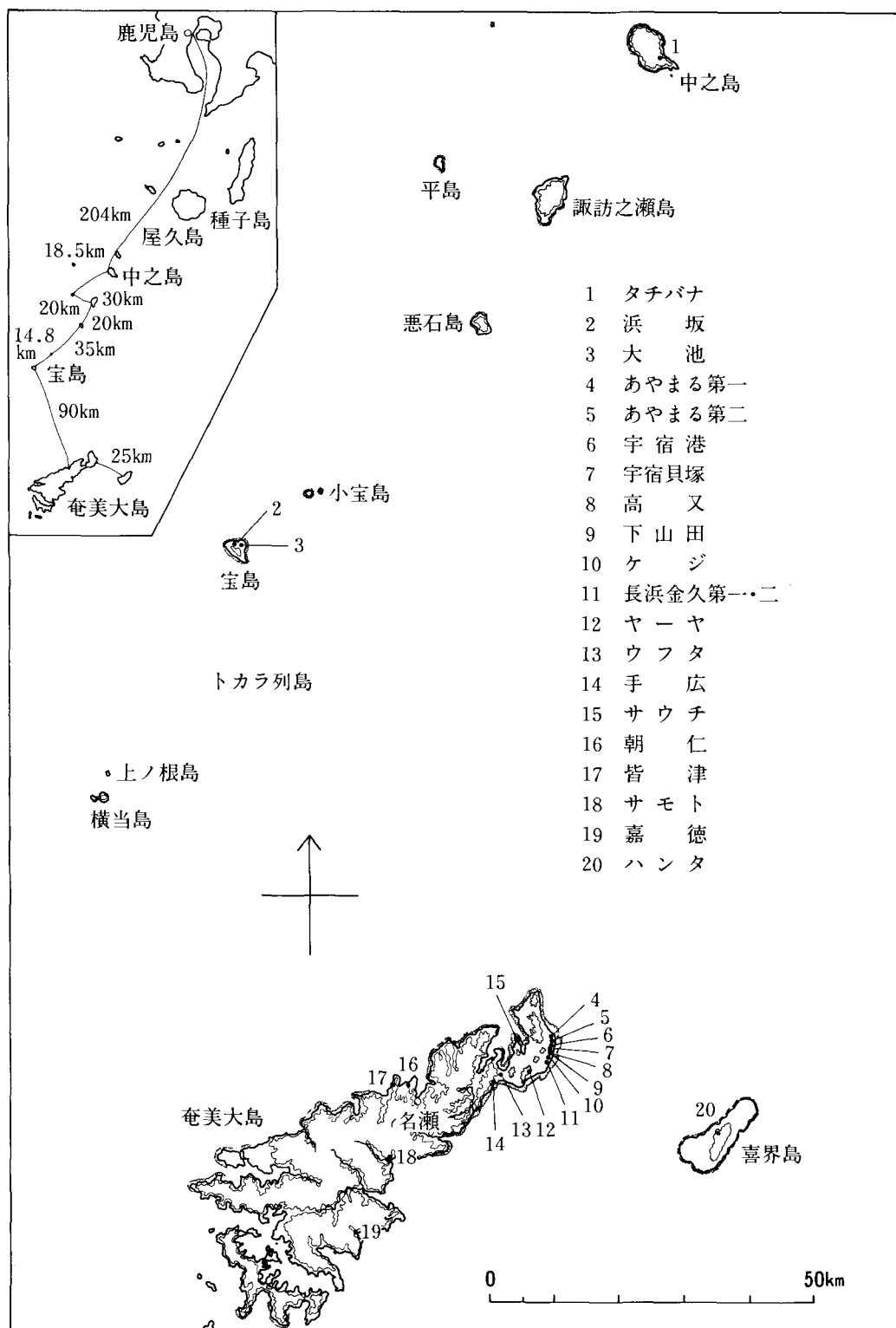


図1 遺跡の分布

じ、この3遺跡から出土する土器を「伊波式土器」と称した。また3遺跡には共通の文化的要素がみられるとし、沖縄諸島と奄美諸島との間には密接な文化交渉があったと述べた。さらに「伊波式土器」の系譜を、九州の市来・出水遺跡出土の縄文土器にもとめ、沖縄諸島と九州の中継点としての奄美諸島の重要性を指摘している〔大山・小原 1933〕⁽⁵⁾。

三宅宗悦は、1935～37年にかけて実施した、沖縄諸島を含む奄美諸島の遺跡調査の成果を「南島の先史時代」として発表し、その中で南西諸島の土器を「南島式土器」と総称し、縄文土器の範疇にはいると考えた〔三宅 1940〕。また彼はごく小規模であるが、徳之島面縄貝塚・喜念貝塚・奄美大島の宇宿貝塚等で発掘調査も実施している。その後、南西諸島における考古学的な調査は、戦後の1950年代まで一時中断する。

戦前の南西諸島の先史文化に関しては、本土の縄文土器文化に系譜をもつものの、地域色の非常に濃いものであるという認識で一致しており、これは現在でも基本的に認められている。しかし戦前の研究は本土の研究者が中心であり、当時の交通の便を考えると断続的な研究にならざるをえなかったという弱点をもっていた。また研究の視点は、「日本文化」の南限を探るといった、本土または九州を中心にして、その周縁文化として南西諸島をとらえようとする傾向が強かったように思われる。唯一、文化の系譜について、台湾以南にも注意を向けるべきだと提唱した大山柏が、当時としては異色の存在だったといえる。

(2) 戦後の研究

1 沖縄諸島

戦後、沖縄では軍政が敷かれたままであり、考古学的な研究もままならなかった。こうした状況の中で、南西諸島研究に大きな影響を与えたのは、柳田国男の南島文化北上論「海上の道」であり、人類学者の金関丈夫と言語学者である宮良当壮の「起源論争」であった〔谷川 1971〕。特に金関は、多角的視野と様々な学問的知識から、南西諸島を研究する上で、南から北上する要素が非常に重要であることを強く主張した〔金関 1955〕。

さて、戦後の考古学的な調査は、地元研究者を中心に沖縄諸島の調査から始まる。多和田真淳は、南西諸島全域の遺跡を精力的に調査し、ゼネラルサーベイによる遺跡の確認と遺物の表面採集をおこなった。そうして従来の資料と併せて、南島出土の土器の編年を試みた〔多和田 1956〕。また彼が提唱した時代区分案は、南西諸島の先史時代を前・中・後・晩と4時期に区分し、前・中・後期を先史時代に、晩期をグスク歴史時代に比定させるもので、戦後の土器研究の基礎となった。その後、高宮広衛も時期区分案を発表したが、これが現在でも時代区分の指標となっている現行編年である。それによると多和田編年の先史時代相当期を貝塚時代とし、早・前・中・後期の4時期に細分している〔高宮 1961〕。当時沖縄諸島では、縄文時代後期相当期以前の文化と、弥生時代の様相が不明であったため、本土の平安時代相当期までの長期間が貝塚時代とされている。1974年には渡具知東原遺跡が発掘調査され〔高宮・知念 1977〕、九州系の曾畑式土器と爪形文

土器が発見され、沖縄諸島の土器文化の初源は、九州の縄文文化に系譜を持つと考えられるようになった[高宮 1975]。そこで高宮は、貝塚時代という用語を使用せず、縄文時代相当期の前期と、弥生時代相当期以降の後期に分け、前期を前Ⅰ～Ⅴ期に、後期を後Ⅰ～Ⅳ期に細分する案を提唱した[高宮 1978]。この編年案は、2次、3次の修正を経て現在に至っている[高宮 1983・1984]。

戦後は、戦前からの問題であった、南西諸島の先史文化の特異性をどのようにとらえられるかという議論が、時代区分の問題と絡んで盛んにおこなわれるようになる。高宮広衛は、沖縄諸島の先史時代文化が本土の縄文・弥生文化の変化とよく対応するとしながらも、一方で、沖縄の独自性も重視しており沖縄独自の編年の可能性を示唆し、2つの時代区分論が展開する可能性を残している[高宮⁽⁶⁾ 1978]。当真嗣一は、本土の縄文文化が沖縄まで波及することは認めるものの、そこには「多くの共通性と共に異質性が存在する」と述べている[当真 1985]。安里進は、沖縄の貝塚文化は縄文文化の影響下に発達したものとし、沖縄貝塚時代前期の文化は縄文文化の枠内において理解できるとしている。また沖縄貝塚時代前期の人々は弥生文化を積極的に受け入れなかったとし、弥生時代以降を「南島続縄文文化」と称することに賛成している[安里 1987]。知念勇は、中部圏をとりあげ、この地域の先史文化を縄文文化の範疇でとらえ地方色の強いものとしている[知念 1992]。また藤本強は、南島考古学は今後の調査研究を待つべきものが多いとし、「南島の文化・社会現象の画期を重視することが大切なことであって、九州・本土編年にひきずられすぎることは避けるべきであろう」と述べている[藤本 1988]。

いずれにしても、今後の南西諸島の先史時代研究は、各時代におけるそれぞれの地域の島々の文化内容を具体的に把握し、内在的な変化の分析を深めることが重要であるように思われる。そのためには、九州の縄文・弥生文化との比較だけでなく南西諸島の島々の先史文化展開の仕方を島ごとにとらえ、それぞれの相関関係をつかむことが重要になってくる。それには沖縄諸島と九州との中間地域である、奄美諸島とトカラ列島の研究は重要であるが、この地域の研究は近年まで沖縄諸島にくらべて密であるとは言えなかった。それでは次に、奄美諸島の戦後の研究動向について述べてみたい。

2 奄美諸島

戦後、奄美の施政権は1953年に返還され、それを機会に1955年、九学会による奄美の総合調査がおこなわれ、国分直一を中心とする考古班は、宇宿貝塚の発掘調査を実施した。⁽⁷⁾調査では上・下2層の文化層が確認され、下層の土器群は有文の土器を、上層の土器群は無文の土器を主体とし、しかも下層の土器に南九州の市来式土器が伴うことが確認された[国分・河口・曾野・原口 1959]。この調査によって、奄美大島の土器を九州の土器編年と対比して検討することが可能になったといえる。なお宇宿貝塚は1978年、再調査がおこなわれ、宇宿下層式土器に市来式土器が伴うことが再度確かめられている[河口・出口・本田 1979]。

1950年代から60年代は、奄美諸島での遺跡の発掘調査数は沖縄諸島に較べて多くないが、重要な調査がおこなわれている。1962年には奄美大島のヤーヤ洞穴[永井・三島 1964]と、トカラ列島

宝島の浜坂遺跡〔三友・河口 1962〕が、1963年には宝島の大池遺跡〔牛島 1964〕⁽⁸⁾が発掘調査された。ヤーヤ洞穴の発掘調査では、爪形文土器が発見された。宝島の大池遺跡の調査でも、爪形文土器が発見されたという。浜坂遺跡からは、喜念Ⅰ式土器と宇宿上層式土器が出土している〔三友・河口 1962〕。また60年代終わりから70年代初めにかけて、白木原和美がトカラ列島から奄美諸島にかけて精力的にゼネラルサーベイをおこなっている〔白木原 1969・1970・1971・1974〕。

1970年代に入ると遺跡の発掘調査数は減少している。しかし1974年には奄美大島の嘉徳遺跡が発掘されており、大きな成果を挙げた〔河口 1974〕。河口貞徳は嘉徳遺跡の発掘成果と、以前の遺跡調査の成果をふまえ、1974年に「奄美における土器文化の編年」を発表した。河口は9つの土器型式を設定し、その内8つの型式について、面縄東洞式→嘉徳Ⅰ式→嘉徳Ⅱ式→面縄西洞式→面縄前庭式→喜念Ⅰ式→宇宿上層式b→宇宿上層式a⁽⁹⁾という編年案を発表した。そして九州の縄文・弥生時代の土器とこれらの土器型式を対比させ、面縄東洞式を縄文後期に、喜念Ⅰ式から宇宿上層式aを弥生時代中・後期に併行する土器と考えた。この土器編年研究によって、奄美諸島の土器文化の研究が進展したことは言うまでもなく、沖縄諸島と奄美諸島をふくめた中部圏の土器文化研究の基礎が築かれた。

1978年以降、1980年代は、鹿児島県文化課を始めとして、笠利町歴史民俗資料館・熊本大学・鹿児島大学・沖縄国際大学の考古学研究室等が調査研究活動を活発におこなった時期である。遺跡の発掘調査数が格段に増加したことにより、土器文化の様相がよりの確に把握されるようになっただけでなく、土器を石器・自然遺物等の他の遺物とともに、遺構との関係でとらえるようになる。共伴関係が不明確であった遺物を、一括遺物としてとらえられる事例が増加したことは、従来の土器編年に大きな影響を与えた。

今回扱う縄文晩期併行期の土器研究で、重要な発掘調査として1979年のトカラ列島中之島のタチバナ遺跡の発掘があげられよう。この調査で従来、弥生時代中期の土器として位置づけられていた喜念Ⅰ式土器と、弥生時代後期の土器と考えられていた宇宿上層式土器が住居址の床面と覆土中から共伴して出土した。この土器群に九州系の縄文晩期の一湊式土器と黒川式土器がともなうことにより、タチバナ遺跡出土の土器群が縄文晩期に遡ることが確実になった。その後、奄美大島サモト遺跡、手広遺跡、喜界島ハンタ遺跡等でも同様の共伴関係が確かめられている。甲元眞之は、タチバナ遺跡の発掘成果をふまえ、当遺跡を縄文晩期に比定し、竅穴住居址と九州縄文後・晩期に多く出土する石器が存在する点から、南島的な要素を具備しながらも北からの影響を想定している〔甲元 1982〕。上村俊雄は、喜念式土器が河口の主張したように弥生土器に伴う可能性はなく、むしろ縄文晩期にさかのぼる型式であり、また宇宿上層式の再分類の必要性を指摘している〔上村 1987〕。

戦後の奄美諸島の縄文時代相当期の研究は、土器文化の研究を中心として進められたといえる。その土器研究は60年代から70年代にかけての「南島式土器」の分類と編年、河口貞徳による編年基礎の確立、そして80年代の遺跡発掘調査の著しい増加と、土器編年の再検討という方向で現在

に至っているといえよう。

では戦後、奄美諸島を含む南西諸島の先史文化自体の性格は、域外との関係でどのようにとらえられてきたのだろうか。河川貞徳は、南西諸島縄文後期相当期に大きな画期があると考えた。南九州の松山式・市来式がそれまでの南島の土器に影響を与え、南島独自の嘉徳Ⅰ・Ⅱ式・伊波式・萩堂式土器が発生し、これ以降の南島先史文化の基本的な流れが生まれるものと解釈している〔河川 1982〕。上村は、南西諸島の先史文化を大陸・南方からの影響も念頭におきつつ、これまでの成果を総合すると、「本土（北方）からの文化の流れが主流であった可能性が強い」と考えている〔上村 1984〕。筆者は、後述するように特に縄文晩期併行期の一時期、奄美大島・トカラ列島の社会・文化に本土の影響とは考えにくい大きな画期が存在し、その変化が土器文化に色濃く反映しているのではないかと考える。

さて、ここで本稿の分析の方針について述べておきたい。縄文晩期併行期で土器群が明確な層中からの一括遺物として把握できるか、もしくは遺構にともなって出土した土器群の器種構成が把握できる遺跡の概要を述べつつ、従来の土器編年の型式土器の問題点も指摘したい。次に土器群を統一した分類方法によって再構築し、土器群の編年的位置づけと器種組成を把握しつつ、変化を抽出しその要因について考えたい。

2 遺跡の概要

タチバナ遺跡（熊本大学考古学研究室 1979・1980）

遺跡 遺跡は、トカラ列島の中之島に所在する。1977・78・79年の3カ年にわたって、熊本大学考古学研究室によって発掘調査がおこなわれた。中之島は地形的にみると、北側にある現在活動中の御岳と南側の休火山とに分かれており、島中央部に海拔200mの平坦地がある以外は、緩やかな傾斜地が数カ所あるだけの峻険な島である。遺跡は島の東側、七つ浜を見おろす海拔約165mの傾斜地上に立地する。

遺跡は集落遺跡で、堅穴住居址30基、土壇14基、炉址14基が発見された。住居址は径4mの円形プランの堅穴住居址と、径が3m以下の小型の堅穴に分かれる。さらに堅穴住居址は、中央に5個のピットをもつ浅い皿状の炉址をもつものと石組の炉址を備えるものの2種に分けられる。土壇はプラン内部に炉址を備えず、しかも内部からは、土器とともに大量の焼土が検出されている。

土器 大量の土器・石器が出土しているが、これらは住居址の床面もしくは覆土中から出土した例が大半であり、堆積土中の出土は非常に少ない。住居址の床面および覆土中から出土した土器は、一括土器群として把握できる。報告者は土器群を7類に分類している。Ⅰ類：喜念式土器（奄美諸島の土器）、Ⅱ類：宇宿上層式土器（奄美諸島の土器）、Ⅲ類：一湊式土器（種子島・屋久島の土器）、Ⅳ類：無文は黒川式土器、有文は入佐式土器、Ⅳ'類：Ⅳ類を模倣した島嶼土器、

VI類：突帯を有する磨研土器である。タチバナ遺跡では、従来、弥生時代中期と後期に時期比定されていた喜念Ⅰ式と宇宿上層式土器に、九州本土で縄文時代晩期に比定されている黒川式土器・入佐式土器・一湊式土器が共伴して出土した。しかも「奄美系の土器は壺系にかぎられ、種子・屋久島の土器は甕形に限られ、九州系の土器は深鉢・浅鉢に限られる」と報告者は述べている。土器の数量からみると、出土した土器の大半は奄美系の土器であり、種子・屋久島系統と九州本土系統の土器は少ない。

石器 磨製石斧・石鋸状石器・磨石・敲石・凹石・石皿で、表面採集したものを含めると200点以上になる。磨石・敲石・凹石・石皿などの植物性食料の加工具と思われる石器が大半を占めている。

手広遺跡 (竜郷町教育委員会 1979, 竜郷町教育委員会・奄美考古学会 1984, 熊本大学考古学研究室 1986)

遺跡 遺跡は奄美大島竜郷町に所在する。1976年、奄美考古学会会員里山勇廣によって発見され、1978年に竜郷町教育委員会・奄美考古学会が試掘調査をおこない、1984年には、熊本大学考古学研究室を中心とする調査団によって、本格的な調査が実施された。

奄美大島の南部は地勢が険しく絶壁が海に臨むところが多く、海岸部は複雑にいくむリアス式海岸を形成している。一方、島の北部を占める笠利半島の地勢は、南に較べると穏やかで、200m足らずの低山が南北に走っており、海岸部は珊瑚礁の発達⁽¹⁰⁾が著しい。半島基部の赤尾木地峡は、非常に狭くその幅は1kmにも満たないが、手広遺跡は、地峡の太平洋側の標高20mほどの海岸段丘状の末端に形成された砂丘上に立地する。遺跡の北側には手広川が流れ、低湿地が形成される。手広遺跡は奄美諸島において、数少ない重層遺跡である。1978年の調査では、面縄西洞式から兼久式にいたる6文化層が発見されており、1984年の発掘調査では8層の遺物包含層を含む19層が確認された。

土器 各遺物包含層ごとに、土器の様相の概略を述べてみよう。土器は、器形によってA類：深鉢・甕に属するもの、B類：鉢に属するもの、C類：浅鉢・皿に属するもの、D類：壺に属するもの、に分類されている。

第14層：出土量は少ない。器形はすべて深鉢で、嘉徳Ⅰ・Ⅱ式に属する。

第13層：深鉢に属する器形には、面縄西洞式土器を含む。また外耳をもつ浅鉢が出土したほかに、無頸に近い壺が出土した。底部はすべて平底である。

第11層：第12層の無遺物層を間層として、最も多く土器を出土した遺物包含層である。深鉢はすべて無文で、口縁が三角形または蒲鉾形に肥厚する。第13層では非常に少なかった壺形土器が増加し、喜念Ⅰ式土器と宇宿上層式土器が共伴して出土する。浅鉢には口縁部に突起を有するものとそうでないものがあり、条痕文を施すものも存在する。平底・丸底気味の平底の他に、第13層からは出土しなかった尖底気味の底部が出現する。出土量からみると、無文の深鉢と壺が多く、有文の壺は少ない。

第9層：出土量は非常に少ない。深鉢と壺、そして浅鉢の器種構成であるが、沖縄系のカヤウチ

バンタ式類似の土器が出土し、深鉢主体となる。台付き土器と外耳土器が盛行する。

第6層：磨研壺が出現し、外耳・山形突起付き土器が増加する。

第5層：刻目突帯文土器、夜臼式類似丹塗磨研壺、それに外耳・山形突起・台付き土器が出土する。

第3層：兼久式土器の時期である。

石器 磨製石斧が1点、第11層から出土している。磨石・敲石・凹石は第11層に多く、また石皿は第6層から12点出土している。櫛形石製品が1点、石鏃が3点、いずれも第6層より出土している。

手広遺跡の2回の発掘によって、奄美大島の縄文時代晩期併行期の終わりから、弥生時代相当期、そして兼久式土器の時期にわたる長期にわたる土器文化の変遷をたどることができるようになった。タチバナ遺跡では、喜念Ⅰ式・宇宿上層式土器と黒川式土器の共伴が確認されたが、当遺跡では、第5層から刻目突帯文土器・夜臼式類似丹塗磨研壺が出土したことにより、この層が縄文晩期終末期に相当し、第11層から第9層にかけての層は縄文晩期に相当する可能性が大であることなど、得られた成果には多大なものがあつた。

サモト遺跡（熊本大学考古学研究室 1983・1984）

遺跡 奄美大島の住用村に所在する。1983年、1984年の2回、熊本大学考古学研究室によって発掘調査された。

住用村は奄美大島の中中部、太平洋側の住用湾に面している。この湾はその奥に南北に2つの小湾を持つ。北の小湾には川内川と金久田川が流れ込み、遺跡はこの金久田川の河口近くの山麓に形成された砂丘性の微高地に立地する。微高地は海拔8mほどで、東西130m、南北70mほどの長三角形を呈し、遺跡南の海岸に形成された砂丘との間には、湿田が東西にひろがる。またサモト遺跡の周囲には、峻険な山々がとりまき、近年まで湾外との陸路による交通は困難を極め、遺跡形成当時は海路以外の交通の手段は考えられなかったと思われる。遺跡はⅠ～Ⅲ層に分層され、遺構としてはⅢ層からは竪穴住居址1基と集石遺構1基が検出され、Ⅱ層からは石組住居址3基が発掘された。

土器 報告者は土器をA類：深鉢及びこれに類するもの、B類：鉢及びこれに類するもの、C類：壺及びこれに類するものに器種別分類をおこなっている。

Ⅲ層からは、集石遺構と竪穴住居址に伴って、有文の面縄西洞式土器と、無文の深鉢それに無文の壺、浅鉢の底部が共伴出土している。深鉢形土器は口径10cmと20cm前後のものに分類され、Ⅲ層出土の土器は深鉢2種、鉢、壺という器種組成が窺える。Ⅱ層出土土器群は、深鉢形はAⅢ～Ⅷ類の6種、鉢はBⅡ・Ⅲ類の2種、壺はCⅡ～Ⅴ類の4種に器種別分類されている。この土器のうち、AⅢ類・CⅡ類は宇宿上層式として一括されたものである。また、AⅣ・Ⅴ類はカヤウチバンタ式系の土器で、深鉢の器種の内その出土量の比率が最も高い。CⅣ類は喜念Ⅰ式に相当する。これらの土器に九州系の黒色磨研土器が共伴出土している。タチバナ遺跡や手広遺跡で

確認されたように、喜念Ⅰ式土器と無文の宇宿上層式土器が堅穴住居址の床面と覆土から共伴して出土すること、そして九州の縄文晩期に比定される黒色磨研土器が伴っていることから、サモト遺跡Ⅱ層出土の土器群は縄文晩期に比定される。またⅢ層の面縄西洞式に代表される土器群が、古相を示すことも再度確認された。

ハンタ遺跡（熊本大学考古学研究室 1986）

遺跡 遺跡は、喜界島に所在する。奄美大島笠利半島の東約25kmにあるこの島は、周囲48.6 km、北東から南西に細長く、その距離は約14kmを測る。隆起珊瑚礁の島で、平坦ではあるが新生代の第三紀鮮新世から島の隆起は現在も続いており、島の最高所（百之台）は標高 224 mに達する。隆起活動によって4段の海岸段丘がつくられ、島の中央部南側斜面では、比高差が100～150mもある断崖が6 kmも続く。遺跡は百之台から北へと広がる台地が、崖となって落ちるその縁に立地し、標高約147mを測り、現在の海岸線までの距離は約2 kmもある。遺跡は集落遺跡で、11基の堅穴住居址が検出された。Ⅰ～Ⅳ層が確認され、遺構はⅡ層の掘り込み中に1基、Ⅲ層掘り下げ中に3基、Ⅳ層最上面で7基が確認された。堅穴住居址は平面形が方形ないし隅丸方形を呈し、その規模は大きいもので1辺3 mを越えないという小さなものである。いずれも住居址周辺には柱穴と思われるピットは検出されず、堅穴内に焼土と、壁直下にピットまたは溝状の掘り込みを有する。

土器 土器の出土量は、発掘面積に比して多く、破片を含めて約9500点に達する。そのほとんどが遺構中からの出土である。報告者は土器をA類：深鉢、及びこれに類するもの、B類：鉢及びこれに類するもの、C類：壺、及びこれに類するものに器種別分類をおこなっている。さらに、口縁部の形態より、A類を6類に、C類を6類に分類している。出土土器の内、AⅠ類は面縄西洞式土器に、AⅡ類とCⅡ類は宇宿上層式に、CⅠ類土器は喜念Ⅰ式土器にそれぞれ比定される。またAⅢ類土器はカウチバンタ式土器に類似するが、サモト遺跡に較べて深鉢形土器に占める割合は少ない。また報告者は、住居址の切り合い関係より、面縄西洞式土器から喜念Ⅰ式土器への変遷がたどれるとしている。この点については、土器の編年の位置づけの項で詳しく述べたい。いずれにしても、当遺跡でもタチバナ遺跡、手広遺跡、サモト遺跡と同様に、宇宿上層式土器と喜念Ⅰ式土器、それにカウチバンタ式が遺構中より共伴出土している事実が確認された。

石器 石斧・敲石・磨石・クガニシ・石皿・砥石が出土しているが、植物性食料の加工具として使用した石器の出土量が多く、他の遺跡と同様の傾向を示す。石器の材質は石斧以外はすべて、砂岩製であることも特徴的である。

3 土器の分類と分析

(1) 土器の分類 (図2)

1 器 形

タチバナ遺跡・手広遺跡・サモト遺跡・ハンタ遺跡出土の土器群は遺構にともなうか、もしくは明確な層位中の一括土器群としてとらえることができる。しかし、土器群の分類方法は各遺跡の報告書単位のものであり、そのため遺跡間の土器群の比較と編年が十分におこなわれてきたとはいえない。本稿では器形を、深鉢形土器・鉢形土器・壺形土器の3器種に分け、新たに土器の製作技法を考慮にいれ、形態・文様の統一した分類規準を設定してみたい。

深鉢形土器 胴部がさほど張らないもので、口径に比して器身の深い土器を「深鉢」とする。2種類に分類する。1つは胴部が屈曲せずに底部に向かってすぼまる砲弾形のAと、屈曲する肩部をもち底部に向かってすぼまる屈曲形のBである。⁽¹¹⁾さらにこのAとBは、底部の形態から、それぞれ平底のものと尖底気味の丸底のものとに大別できる。⁽¹²⁾

次に、貼り付け突帯の有無と位置・数によって、6つに分類する。口唇部または口縁部と胴部に、2条の貼り付け突帯を施すものをI、口唇部または口縁部に1条の貼り付け突帯を施すものをII、口縁部を肥厚させ胴部に2条の突帯を施すものをIII、口縁部を肥厚させ胴部に1条の突帯を施すものをIV、突帯をもたず口縁部を肥厚させるのみで、貼り付け突帯をもたないものをV、貼り付け突帯をもたず口縁部も肥厚させないものをVIとする。

さらに、口縁の肥厚を、その成形方法から4つに細分する。肥厚させた口縁部を成形するさい、上下の2方向から調整するため断面が三角形を呈するものを1、肥厚させた口縁を上と横方向から成形するため、口縁部の断面形が蒲鉾形を呈するものを2、口縁を幅数cmにわたって強く成形するため、肥厚部が带状になるものを3とする。口縁部を若干肥厚し、やや外反させるか垂直になるものを4とする。

鉢形土器 口径に比して、器高の低い土器を「鉢」とする。出土数が少数のため、統一した分類規準は設定せず、個々の土器について説明する。

壺形土器 肩部の張りが強く、胴部の最大径が口径をうわまわるものを「壺」とする。貼り付け突帯の有無と口縁部の形態によって、2つに分類し、貼り付け突帯を施すものをI、貼り付け突帯を施さないものIIとする。さらに深鉢形土器と同様に、口縁の成形技法による形態によって1～4に細分した。

2 文 様

突帯上の文様 貼り付け突帯上に、文様を施すものとそうでないものがあり、有文のものは施文方法から4つに分類する。平坦または叉状にわかれた施文具を、押し引いて施文するため、文様の形状が隅丸長方形または長方形になるものを「横O字形」、平坦または叉状にわかれた施文


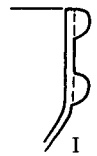



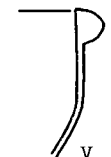
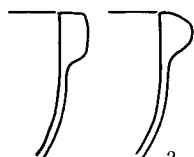



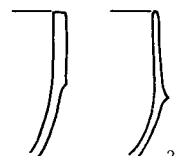
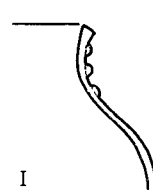




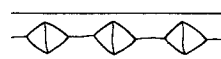




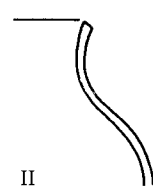
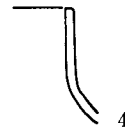
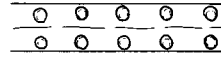
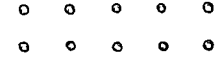
深鉢形土器の分類			
胴部の形態	突帯の有無と位置・数		口縁部の形態
<p>A</p> 	 <p>I</p>	 <p>IV</p>	 <p>1</p>
	 <p>II</p>	 <p>V</p>	 <p>2</p>
<p>B</p> 	 <p>III</p>	 <p>VI</p>	 <p>3</p>
壺形土器の分類		文様の分類	
突帯の有無	口縁部の形態	突帯上の文様	胴部上の文様
<p>I</p> 	 <p>1</p>	 <p>横O字形</p>	 <p>有軸羽状文</p>
	 <p>2</p>	 <p>D字形</p>	 <p>綾杉文</p>
	 <p>3</p>	 <p>V字形</p>	 <p>斜行洗線文</p>
<p>II</p> 	 <p>4</p>	 <p>刺突列点文</p>	 <p>刺突列点文</p>

図2 土器の分類

具を、押しつけて刻むか、または刺突するため文様の形状が算盤の玉形になるものを「D字形」、施文具を縦に使って、沈線状の刻みを施すものを「V字形」とする。また、先の細い竹ぐし状の⁽¹³⁾ものでつきさして列点状の文様を施すものを「刺突列点文」とする。

貼り付け突帯間の文様 先の細い竹ぐし状のものでつきさして列点状の文様を施すものを「刺突列点文」とする。1本の線を中心に、斜行沈線を描く「有軸羽状文」、沈線によって綾杉状の文様を施す「綾杉文」、交互に反対方向に沈線文を描く「斜行沈線文」、沈線を平行に描く「平行沈線文」の4つに分類する。

(2) 土器の分析

1 土器群の層位による前後関係の把握

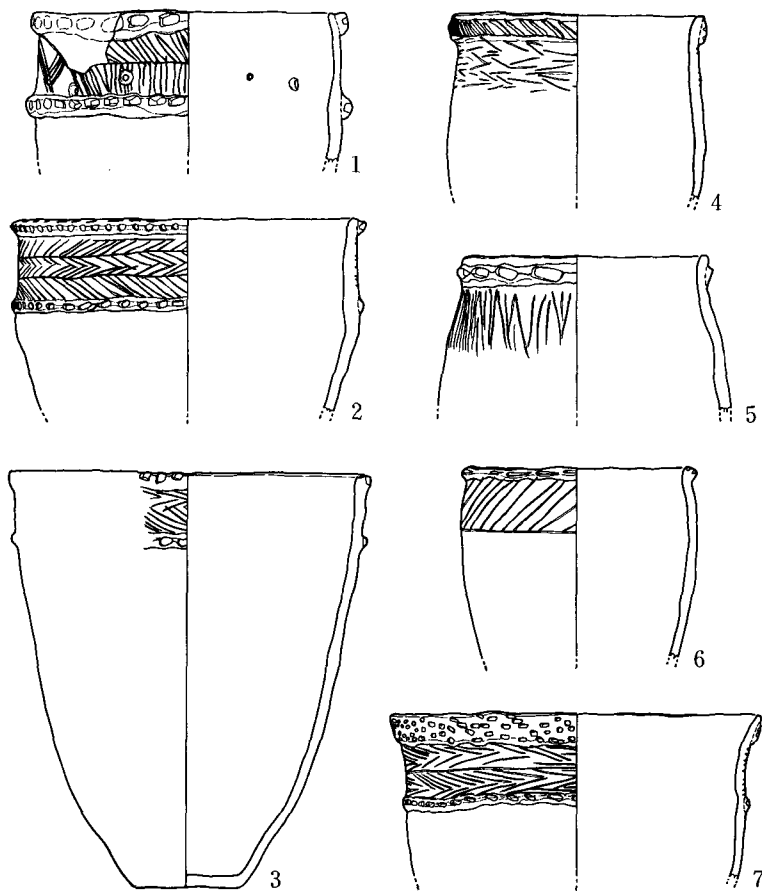
各遺跡出土の土器を分析する前に、出土土器群の前後関係が層位関係から指摘できるものについて確認しておきたい。重層遺跡における古相の土器群は、2条または1条の貼り付け突帯間に沈線文を施す面縄西洞式を指標とするものであり、手広遺跡第13層・サモト遺跡Ⅲ層6・9・10号遺構から出土した一括土器群がこれに該当する。重層遺跡で、これらの土器群に層位的に後続する土器群は、無文の宇宿上層式と喜念Ⅰ式土器を指標とするもので、手広遺跡第11層・サモト遺跡Ⅱ層の遺構・ハンタ遺跡3・4・7号遺構で出土した土器群がこれに該当する。これらの土器群は、手広遺跡の場合、第13層と第11層の間に間層として第12層が存在し、またサモト遺跡では、Ⅱ層とⅢ層が連続するが双方とも全く異なった様相をもつ層であり層位的に安定している。さらに住居址または遺構に伴って検出された土器群であり、出土状況からも安定していると言える。

以上の層位関係から、土器群の様相は上述したように、大まかに2グループに分かれることがわかる。そしてこの2つのグループの前後関係は、面縄西洞式を指標とする第1の土器群のグループから、宇宿上層式と喜念Ⅰ式を共伴する第2の土器群のグループへの変遷がたどれる。それでは、第1グループの手広遺跡第13層とサモト遺跡Ⅲ層遺構出土の土器群は、時期的に併行関係にあり、土器群の内容の差は地域差としてとらえるのか、それともやはり前後関係と考えるのが妥当なのかが問題になる。また後続する手広遺跡第11層、サモト遺跡Ⅱ層遺構、ハンタ遺跡3・4・7号遺構の第2グループの土器群も同様に時期的に併行関係にあるのか、それとも前後関係が考えられるのか問題になろう。そして、タチバナ遺跡の土器群と、ハンタ遺跡住居址の土器群が第2グループ内で、どのように編年的な位置づけが考えられるのかが焦点になろう。

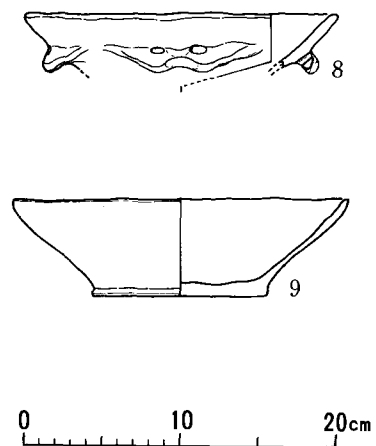
2 各遺跡出土一括土器群の分析

手広遺跡第13層出土土器群 (図3, 表1) 土器の出土数は多くなく、破片を含めても20点足らずで、器形が復元可能なものは11点を数える。このうち深鉢形土器は8点、浅鉢形土器は2点、壺形土器は1点出土しており、器種構成の約7割を深鉢形土器が占める。深鉢形土器は、すべてAの砲弾形で、無文のもの1点、有文のもの6点に分かれる。さらに有文の土器は、大きさから

深鉢形土器



鉢形土器



壺形土器

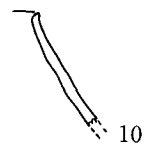


圖3 手広遺跡第13層出土土器群

表 1 手広遺跡第13層
深鉢形土器

器 形	突帯 と 口縁	貼り付け突帯上と突帯間の文様				無 文	突帯 と 口縁	無 文
		横O字形		V字形				
		有軸羽状	綾杉	綾杉	平行沈線			
A 大 型	I	3 (27.3)	1 (9.1%)	—	—	—	I	—
	Ⅱ	—	—	—	—	—	Ⅱ 1	—
	V	—	—	—	—	1 (9.1)	Ⅱ 2	—
A 小 型	I	—	—	—	—	—	Ⅱ 3	—
	Ⅱ	—	1 (9.1%)	1 (9.1)	1 (9.1)	—	Ⅱ 4	1 (9.1)

口径25cm前後の大型のもの（1～3・7）と、口径15cm前後の小型のもの（4～6）に分かれる。

深鉢Aで有文大型の土器は、すべて口唇部と胴部に2条の貼り付け突帯をめぐらすI（1～3・7）のもので、突帯上に横O字形の押し引き文様を施す。横O字押し引き文は、縦横約0.8cmのもの（1・3）から0.2cmほどのもの（2・7）と、大きさに差がある。また口唇部にめぐらした突帯上に、3列に押し引きを施すもの（7）もある。2条の貼り付け突帯間には、有軸羽状文（2・7）と綾杉文（3）とが描かれるが、貼り付け突帯間の文様が、斜行沈線文と有軸羽状文の両方のモチーフを施したもの（1）もある。3は完形に復元できた土器で、口径23cm、器高27cmを測る平底である。第13層出土のその他の土器底部破片もすべて平底であることから、深鉢の器形は胴部に屈曲がない平底と考えて間違いなからう。また深鉢Aの器面調整は、丁寧な横ナデである。深鉢Aの有文の小型土器は、3点とも口唇部または口縁部に、1条の貼り付け突帯をめぐらすII（4～6）である。貼り付け突帯上と胴部の文様から分類してみると、横O字形の押し引き文を施し、胴部に縦方向の綾杉文を描くもの（5）、V字刻み目を施し、横方向の綾杉文を描くもの（4）、やはりV字刻み目を施し、平行沈線文と胴部に1本の沈線文を描くもの（6）の3種が出土している。深鉢形土器は、大きさに関わらずAに分類されるが、Iの2条貼り付け突帯は大型のものに、IIの1条突帯は小型のものに限られる。つまり貼り付け突帯の数が、土器の大きさによって使い分けられていることが窺える。

壺形土器は、無文のもの（10）が1点出土している。無頸に近いII 4で、胎土は軟質で軽い。浅鉢形土器が2点出土しており、1点は平縁で、2個の孔を穿った外耳を胴部につけている（8）。

サモト遺跡Ⅲ層遺構出土土器群（図4、表2） 遺跡出土の土器片の点数は、発掘面積に比して多く1万点を越えるが、大半がⅡ層から出土したものである。このうち、器形・文様等の観察が可能なものは500点余りに及ぶが、Ⅲ層出土の土器は少量で約50点前後である。このうち器形が復元可能なものは、17点を数える。内訳は、深鉢形土器が16点、壺形土器が1点で浅鉢形土器は出土しておらず、器種構成のうち9割以上を深鉢形土器が占める。深鉢形土器は、大きさにより口径20～25cm前後の大型のもの（1～4）と、口径10～15cmの小型のもの（5～10）に分かれ

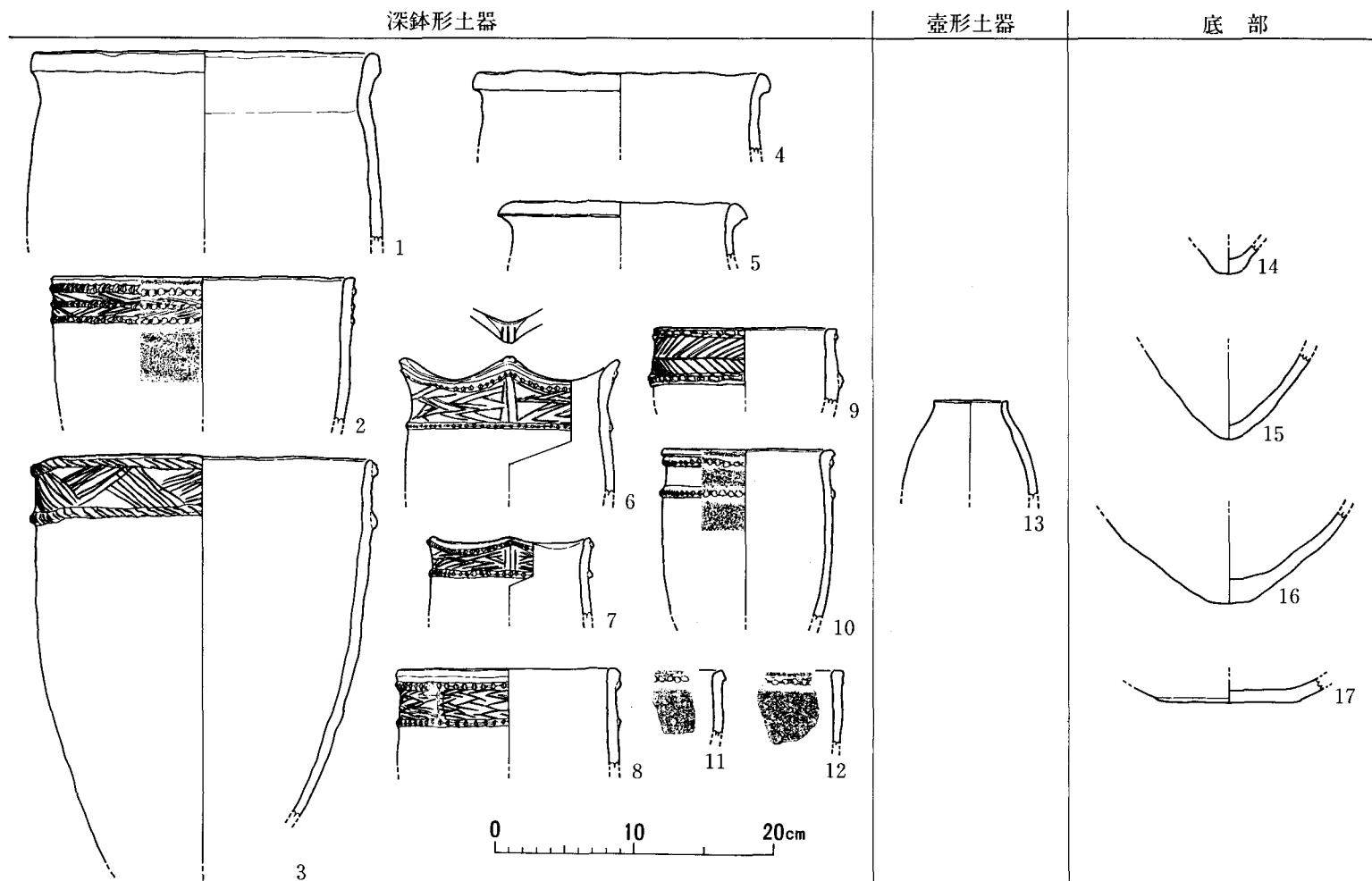


図4 サモト遺跡Ⅲ層遺構出土土器群

(6号遺構1・4・5・7・9・11・14~17, 9・10号遺構2・3・6・8・10・12・13)

表2 サモト遺跡6・9・10号遺構
深鉢形土器

器 形	突帯 と 口縁	貼り付け突帯上と突帯間の文様				無 文	壺形土器	
		横O字形	D字形		V字形		突帯 と 口縁	無 文
		有軸羽状	綾杉	なし	斜行沈線			
大型 A	I	—	2 (11.8%)	—	1 (5.9)	—	I	—
	II	—	—	—	—	—	II 1	—
	V	—	—	—	—	1 (5.9)	II 2	—
B	V 2	—	—	—	—	3 (13.9)	II 3	—
							II 4	1 (5.9)
小型 A	I	1 (5.9)	5 (29.4%)	1 (5.9)	—	—		
	II	—	—	2 (11.8)	—	—		
	V 1	—	—	—	—	1 (5.9)		

る。大型の深鉢形土器は、Aの砲弾形のもの4点と、屈曲形Bのものが3点出土するが、屈曲形はすべて無文のV 2に分類される。

大型深鉢Aで有文のもの(2・3)は、口縁部と胴部に2条または3条の貼り付け突帯をめぐるIである。手広遺跡第13層のIの8のように、口唇部に突帯をめぐる形態ではなく、口唇部から少し下がった口縁部に突帯をめぐるため口唇部が肥厚せず垂直に立ち上がる。文様は突帯上に、叉状工具によるD字形の刻み目文様を施し、3条の貼り付け突帯間に斜行沈線文を描くもの(2)と、突帯上にV字形の刻み目を施し、突帯間に、沈線文を施すもの(3)がある。深鉢Aの器面調整は、丁寧な横ナデである。土器2の3条突帯の文様は、有軸羽状文の中心の沈線文が、突帯に置き換えられたため、生じたものと思われる。

深鉢Aの小型は、口縁部に2条の貼り付け突帯をめぐるI(6~10)と、1条の貼り付け突帯をめぐるII(11・12)に分けられる。貼り付け突帯上と胴部の文様から分類すると、横O字形の押し引き文を施し、胴部に縦方向の綾杉文を描くもの(9)は1点と少数で、叉状工具によるD字刻み目を施し、横方向の綾杉文を描くもの(6・7・8)が5点と多い。また突帯間に文様のない土器(10)もある。貼り付け突帯は、口唇部ではなく口唇部から少し下がった口縁部にめぐらしている。小型深鉢形土器には、突帯上にV字形刻み目を施すものは、出土していない。また口縁が平縁ではなく、山形口縁になるもの(6・7)もある。また口径等復元できないものの、突帯上にD字形の刻み目を施し、胴部に文様を描かない土器(11・12)が2点出土している。おそらく小型で、深鉢AのIIに分類されるのであろう。

壺型土器は、無文のBが一点出土している。無頸に近いII 4で、胎土は軟質で軽い。手広遺跡第13層出土の壺形土器と非常によく類似する。

底部は、平底の破片とともに、尖底気味の丸底が3点出土している。完形土器が見つかっておらず、口縁部と対応関係は不明である。

タチバナ遺跡住居址出土土器群(図5, 表3) 遺跡出土の土器は非常に多いが、今回観察し使

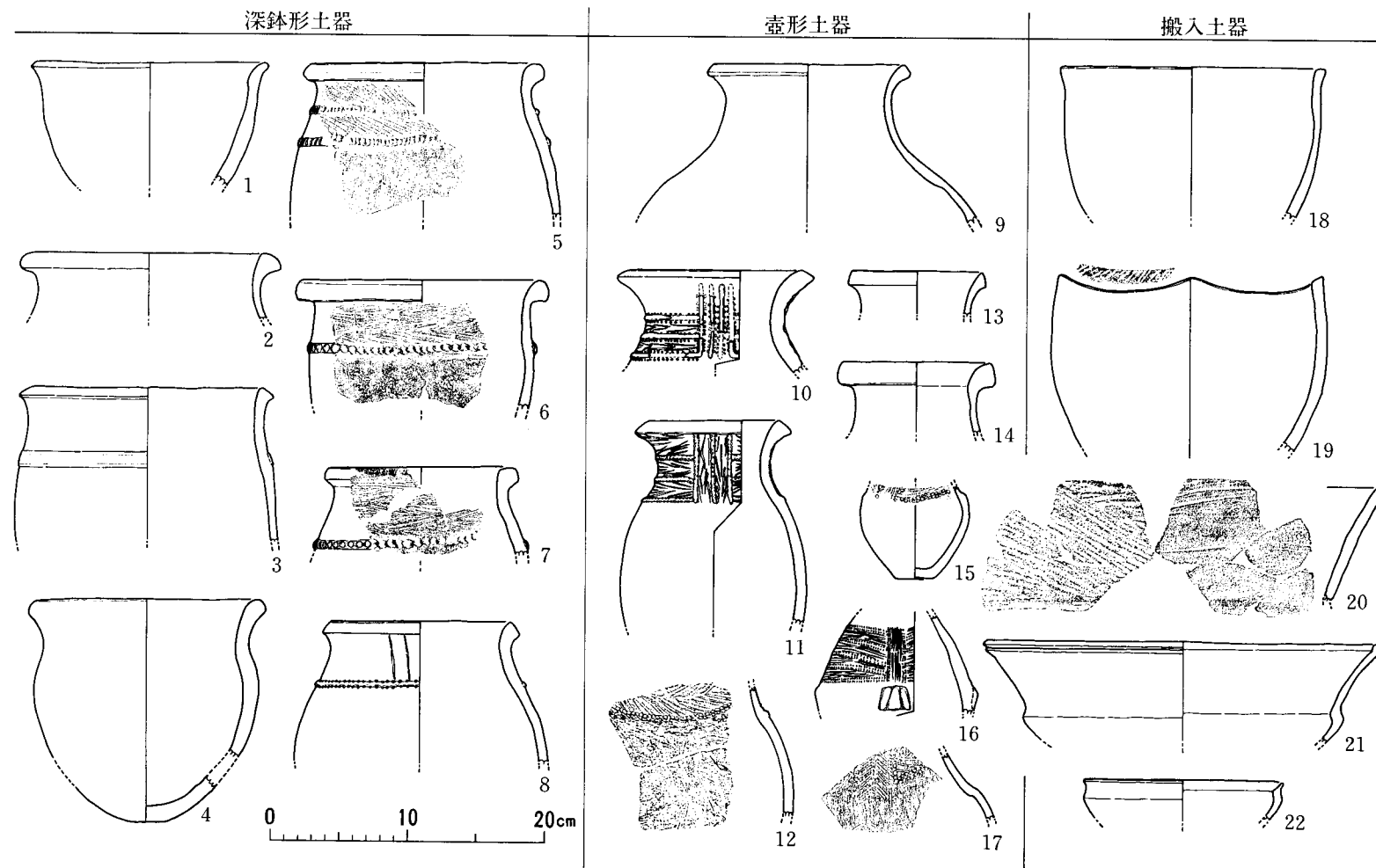


図5 タチバナ遺跡住居址出土土器群

表3 タチバナ遺跡

深鉢形土器				壺形土器					
器 形	突帯 と 口縁	文様	無 文	突帯 と 口縁	突帯上・間文様、肩部・胴部文様				
		D字形			D字形	刺突文*		綾杉 沈線	無 文
		綾杉				綾杉	文様無		
A	Ⅵ	—	37 (20.8)	Ⅰ 1	1 (0.6)	16 (9.0)	3 (1.7)	—	—
B	Ⅲ	7 (3.9%)	—	Ⅱ 1	—	—	—	3 (1.7)	30 (16.9)
	Ⅳ	4 (2.2%)	—	Ⅱ 2	—	1 (0.6)	—	4 (2.2)	48 (27.0)
	V 1	—	1 (0.6)	Ⅱ 4	—	—	—	—	2 (1.1)
	V 2	—	4 (2.2)						
	Ⅵ	—	4 (2.2)						

* Ⅰ 1 の刺突文は突帯上に施され、Ⅱ 2 は突帯がないため刺突文は肩部から胴部に施される。

用した土器は180点弱である。器種構成は、深鉢形土器が180点のうち約32%、浅鉢形土器が約7%に対し壺形土器は約61%を占める。タチバナ遺跡の器種構成が他の遺跡と異なる点は、搬入土器が多い点である。深鉢形土器の約20%は、種子島の一湊式土器（19）と、それを在地で模倣した土器で占められる（18）。また約7%を占める浅鉢の内、九州本土の黒川式土器（21）と入佐式土器（20）が、それぞれ約半数を占める。それに対し、壺形土器は奄美系の土器が主流をなす。そこで、編年のための土器の分析は、搬入土器を取り除いた土器群についておこないたい。

在地で製作されたと考えられる深鉢形土器は、いずれも屈曲形の深鉢Bで、有文と無文に分類される。無文土器は断面が三角形になるV 1（2）、蒲鉾状になるV 2（4）、口縁を肥厚させないV 4の三種類に分かれる。いずれの土器も、大きさによる区別はなく口径10～15cmを測る。有文土器は、口縁部を肥厚させ2条の貼り付け突帯をめぐらすⅢと、口縁部を肥厚させ1条の突帯を施すⅣに分類される。Ⅲの口縁部はいずれも1の断面三角形で（5）、突帯上に半裁竹管叉状工具によって施文されているが、刺突に近い施文法のため、形状が三日月形になる。突帯間の文様は平行沈線文、または綾杉文を描く。Ⅳの口縁部も1に成形され、突帯上の刺突文と口縁突帯間の文様はⅢに類似する。また深鉢BのⅢに分類される土器（8）で、突帯上の文様が、半裁竹管による刻み目または刺突文から、竹串状の施文具による刺突列点文に変化しているものもある。

壺形土器は、全体の約61%を占め出土量が最も多いが、そのうち壺形Ⅰの突帯をもつものは全体の約10%を占め、口縁の形態はすべて1の断面三角形の形態である。貼り付け突帯は、深鉢形のⅡやⅢのものと比べると細く、しかも2条ないし3条のものを縦と横に組み合わせて貼付している。そして突帯の両側または上部に、刺突列点文を施す（10・11・12）。突帯間の文様は、綾杉文を描くものが多いが、突帯と刺突列点文だけを施し文様を充填しないものもある。

貼り付け突帯をもたない無文の壺形Ⅱは、全出土量の約45%を占め最も多い形態である。大きさは、口径から20cm前後のものと10cm前後の2種に分類されるが、復元可能な個体がないため、全体の器形は不明である。しかし、遺跡から出土した底部のほとんどが丸底であり、底部に用いられている胎土と焼成の具合とを、口縁部のそれと比較すると同一個体である可能性が高く、壺

形土器は胴部の張った丸底と考えるのが妥当であろう。口縁の形態から分類すると、無文の壺形の内、1 (13・14) の形態が約38%, 2 (9) が約60%, 4 が2%を占める。また壺形Ⅱで突帯をもたないが、刺突列点文と綾杉文を施すもの(16)もある。

ハタタ遺跡3・4号遺構出土土器群 (図6, 表4) 遺跡出土の土器は非常に多いが、今回観察し使用した土器は70点弱である。器種構成は、深鉢形土器が全体の約45%, 浅鉢形土器が約10%弱に対し、壺形土器は約45%を占める。深鉢形土器は有文と無文に分類され、無文は屈曲形の深鉢Bで、断面が三角形になるV1 (2・3・4), 蒲鉾状になるV2 (1) と、帯状に肥厚するV3の3種類に分かれる。いずれの土器も、大きさによる区別はなく口径10~15cmを測る。有文土器は、細片がほとんどで、大きさを復元できたものはなく、また形態がAかBかを判断できる資料も10(A) だけである。

形態は、2条の突帯をめぐらすⅠで、突帯上にD字形の刻み目をいれ、突帯間を綾杉文または沈線文で描くもの(5・7・11)と、口縁部を肥厚させ、1条の貼り付け突帯をめぐらすⅣに分類される。さらにⅣは、肥厚させた口縁部下端に直接刻み目を施すもの(6・8・9)と、1条の突帯のもの(10)に分かれる。Ⅳの口縁部は1の断面三角形(6・9・13)か、2の蒲鉾状(8・10)である。突帯上もしくは口縁直下の刻み目は、半裁竹管叉状工具による施文のものと刺突列点文とに分類されるが、9は同一土器上で2つの手法で文様が施文されている。突帯間には、平行沈線文・綾杉文それに斜行沈線文を描く。

壺形土器は、全体の約45%を占めるが、そのうち壺形Ⅰの突帯をもつものは全体の約7.7%を占める。口縁の形態は不明である。突帯の形態は、細い突帯を縦と横に組み合わせて貼付し、突帯の両側または上を、刺突列点文で施文する(19~23)。突帯間は綾杉文を描くものが多いが、突帯と刺突列点文だけを施し文様を充填しないものもある。壺形Ⅱのうち、貼り付け突帯をもたず、文様もない土器は約34%を占める。無文の壺形土器は10cm前後の小型で、器高は復元できた個体がないため不明であるが、遺跡から出土した底部のほとんどが丸底であり、胴部の張った丸底の形と推定される。口縁の形態から分類すると、無文の壺形土器は1と2に分類される。

6・7号遺構は、いずれも土器片の出土量が多いが、細片で器種構成を把握するには適当といえない。6号遺構からは、Ⅳに分類され肥厚した口縁下端に刺突列点文を施し、その間を斜行沈線文を描いたものⅣ(48)が出土している。

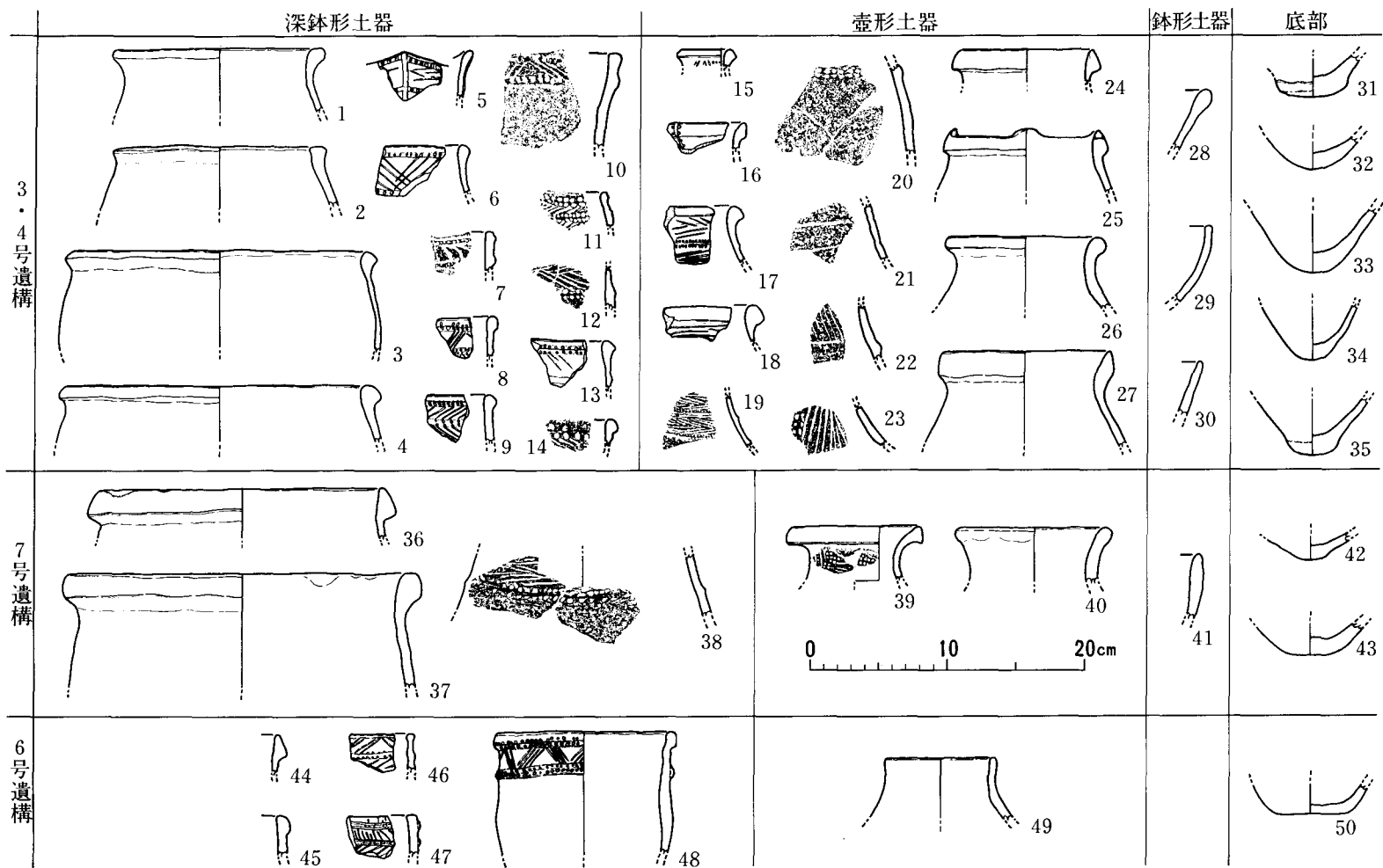


図6 ハンタ遺跡住居址出土土器群

表4 ハンタ遺跡3・4号住居址
深鉢形土器

器 形	突帯	突帯上・間文様			無 文
	と	D字形*			
	口縁	綾杉	斜行沈線	沈線	
B	I	2 (3.0)	—	—	—
	Ⅳ	—	3 (4.6)	4 (6.2)	—
	V 1	—	—	—	3 (4.6%)
	V 2	—	—	—	15 (23.0%)
	V 3	—	—	—	3 (4.6%)

壺形土器

突帯 と 口縁		突帯上, 間, 肩部文様	
		刺突文	無
		綾杉	文
I 1	5 (7.7)	—	—
II 1	—	—	6 (9.2)
II 2	—	—	17 (26.1)
II 4	—	—	1 (1.5)

* IVに分類した土器(図6—9)は、上部の突帯にD字形刻み目文を、下部突帯に刺突文を施す。

手広遺跡第11層出土土器群(図7, 表5) 遺物包含層出土の土器の点数は非常に多いが、今回観察に使用した土器は破片を含めて130点弱である。器種構成は、深鉢形土器が全体の約38%、浅鉢形土器が約4%に対し壺形土器は約58%を占める。壺形土器が全体の約6割を占めるという器種構成の傾向は、タチバナ遺跡と共通する。

深鉢形土器はいずれも屈曲形の深鉢Bで無文であり、有文のものは出土していない。無文の深鉢形は断面が三角形になるV 1 (1・3・4・6)、蒲鉾状になるV 2 (5)と、V 3 (2)の3種類に分かれるが、V 2の出土量が最も多くV 1・V 3がこれにつぐ。また深鉢形Bは、口径の大きさによって、14~20cmと25cm以上の2種類に分類される。

壺形土器は、全体の約60%を占め、出土量が最も多いが、その内、壺形Iの突帯をもつものは全体の約11%を占めており、口縁の形態はすべて1の断面三角形の形態である。突帯は幅が狭く、しかも2ないし3条を縦と横に組み合わせて貼付している。突帯の左右両側、または上から刺突列点文が施されているもの(23・27)、突帯間は綾杉文を描くものが多いが、突帯と刺突列点文だけを施し文様を充填しないものもある。壺形IIの貼り付け突帯をもたず、しかも文様のない土器は約43%を占め、出土した土器の内最も量が多い。無文の壺形土器は、口径からみると15~20cm前後のものと、10cm前後の2種があるが、器形は復元可能な個体がないため詳細は不明である。しかしタチバナ遺跡と同様に、遺跡から出土した底部のほとんどが丸底であり、壺形土器の

表5 手広遺跡第11層

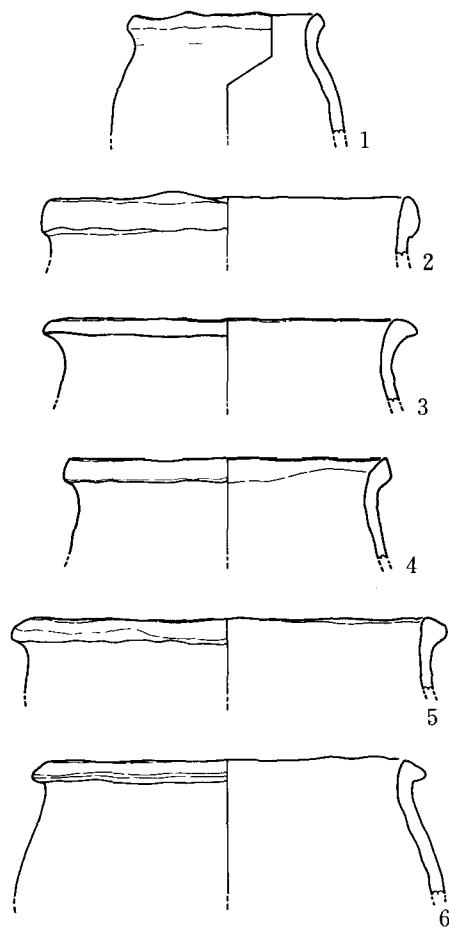
深鉢形土器

器 形	突帯 と 口縁	無 文
B	V 1	16 (12.6%)
	V 2	24 (18.9%)
	V 3	8 (6.3%)

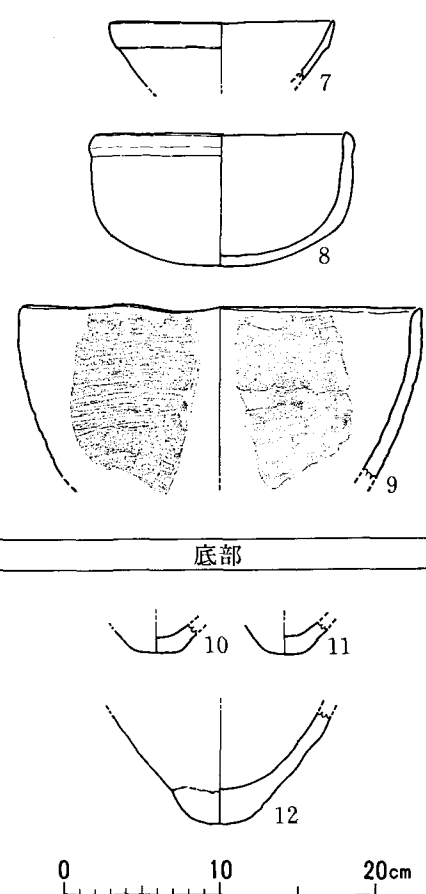
壺形土器

突帯 と 口縁	突帯上・間文様, 肩部・胴部文様					
	刺突文			綾 沈		無
	綾杉	沈線	文様無	杉	線	
I	9 (7.1)	2 (1.6)	3 (2.4)	—	—	—
II 1	—	—	—	1 (0.8)	5 (3.9)	16 (26.0)
II 2	—	—	—	—	—	20 (15.4)
II 4	—	—	—	—	—	1 (0.8)

深鉢形土器



鉢形土器



底部

壺形土器

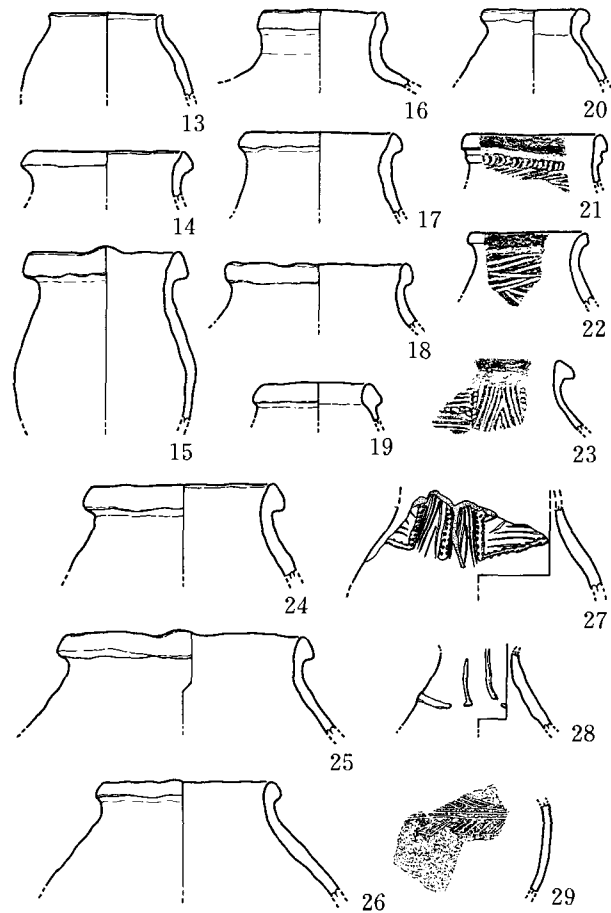


図7 手広遺跡第11層出土土器群

器形は胴部の張った丸底と考えられる。口縁の形態からみると、無文の壺形の内1 (25) の形態が約61%, 2 (26) のものが約37%, 3が1点である。また壺形Ⅱで突帯をもたないが、沈線で綾杉文を施すもの (29) もある。

鉢形土器に、外器面全体に条痕を施したもの (9) がある。

サモト遺跡Ⅱ層遺構出土土器群 (図8, 表6) 1・4・11号遺構を中心にⅡ層から出土した土器片の出土量は非常に多く、総数1万点以上に達するが、形態・文様の観察に可能なものは少なく、1・4・11号遺構で使用した土器は160点弱である。器種構成は、深鉢形土器が全体の約76%, 浅鉢形土器が約3%弱に対し、壺形土器は約21%を占める。深鉢形土器が全体の約8割弱を占めるという器種構成の傾向は、タチバナ遺跡・手広遺跡第11層と異なる。深鉢形土器はいずれも屈曲形の深鉢Bで無文のものが大半を占める。無文の深鉢形は断面が三角形になるV1は非常に少なく2点しか出土しておらず、蒲鉾状になるV2も、深鉢Bの9%弱にしかすぎない。全体の約9割は、口縁を帯状に肥厚させるV3 (1・2・4) が占める。有文のものは5点出土しており、口縁部を帯状に肥厚させるV3 (3) で、この部分に「雷文」様の文様を描く。深鉢形Bは、復元可能な土器が少数で、大きさによる区別の有無は不明である。

壺形土器の内、壺形Ⅰの突帯をもつものは全体の約3%と微量である。口縁の形態は不明だが、貼り付け突帯は幅が細いものを貼付しており、その両側または上に沈線文を施す (13)。突帯間には綾杉文を描くものが多いが、突帯と刺突列点文だけを施し文様を充填しないもの (20) もある。

壺形Ⅱの貼り付け突帯をもたず、しかも文様のない土器は約14%を占める。無文壺形Ⅱの内、1の断面三角形の形態が約4割弱、2のものも約4割、3が約2割を占める。また壺形Ⅱで突帯をもたないが、沈線で綾杉文を施すもの (22) もある。また、列点文を沈線文で代用させたもの (21) もある。

浅鉢形土器は4点出土している。胴部の張りがみられないものと、口縁部がほぼ直立し帯状に肥厚し、胴部から底部にかけてそのまますばまっていくもの (8) がある。

2号遺構は、1・11・14号遺構と類似した土器群を有する。2号遺構で使用した土器は100点

表6 サモト遺跡Ⅱ層1・4・11号遺構

深鉢形土器				壺形土器			
器 形	突帯 と 口縁	無 文	口 縁 雷 文	突帯 と 口縁	突帯上・間文様、肩部・胴部文様		
					刺突文		無 文
					綾杉	文様無	
					綾杉		
B	V 1	2 (1.2%)	—	Ⅰ	3 (1.9)	2 (1.2)	—
	V 2	10 (6.2%)	—	Ⅱ	—	1 (0.6)	7 (4.3)
	V 3	102 (63.4%)	5 (3.1)	Ⅱ 1	—	—	—
				Ⅱ 2	—	—	8 (5.0%)
				Ⅱ 4	—	—	8 (5.0%)
							4 (2.5%)

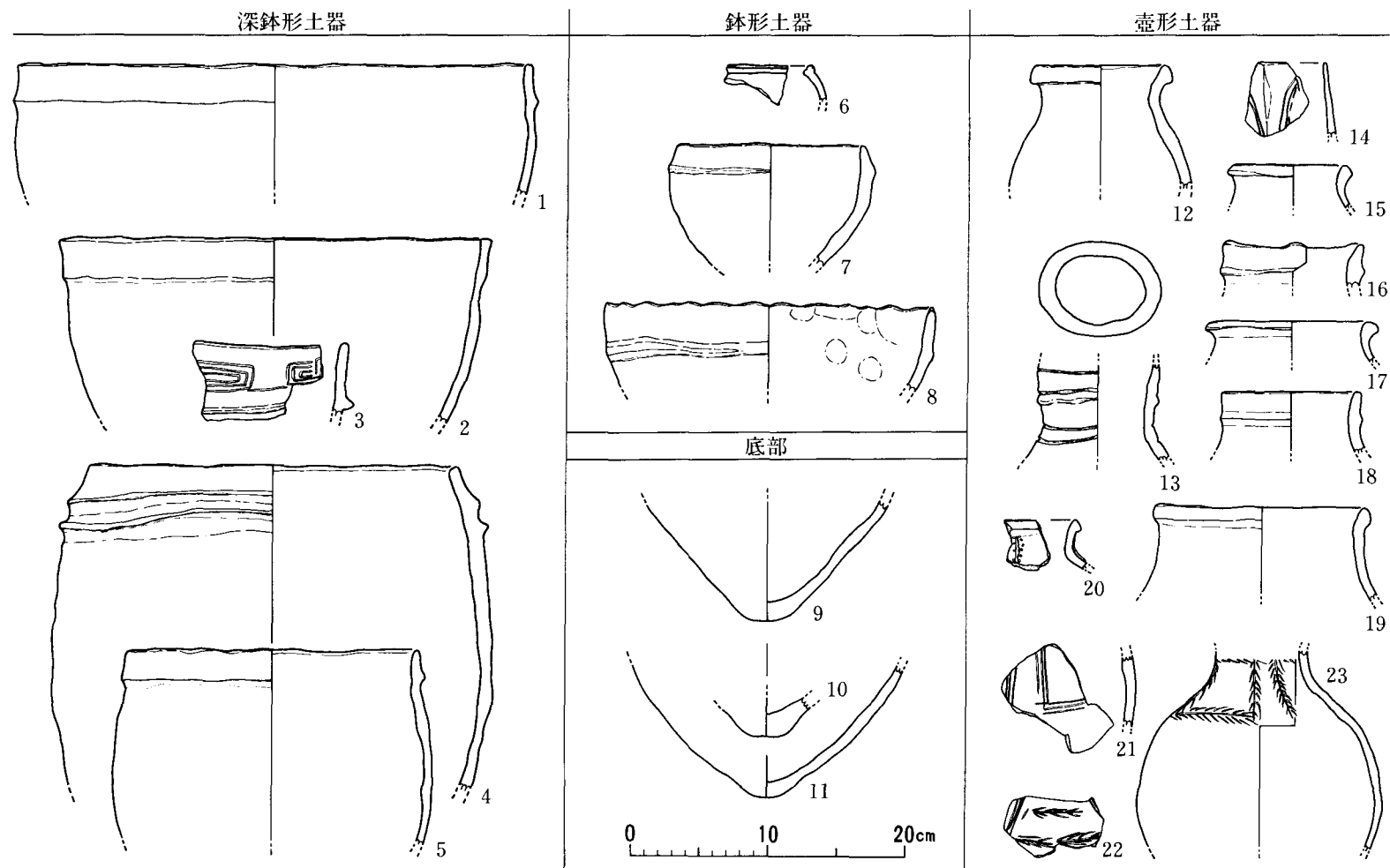


図8 サモト遺跡Ⅱ層出土土器群

表7 手広遺跡第9層土器群
深鉢形土器 壺形土器

器 形	突帯 と 口縁	無 文	口 縁 外 耳	突帯 と 口縁	肩部文様	
					沈 線	無 文
B	V 3	4 (25.0%)		II 4	2 (12.5)	1 (6.3)
A	VI	2 (12.5%)	6 (37.5)			

弱である。器種構成は、深鉢形土器が全体の約76%、浅鉢形土器が約3%弱に対し、壺形土器は約21%と、1・11・14号遺構土器群と同一の器種組成である。深鉢形土器は、いずれも屈曲形の深鉢Bで無文のものが大半を占める。無文の深鉢形は口縁の断面が三角形になるV1は出土しておらず、蒲鉾状になるV2も、深鉢Bの約11%と占める割合は低い。全体の約9割は、口縁を帯状に肥厚させるV3が占める。

7号遺構出土の土器群は、1・11・14号遺構、2号遺構と同様の傾向を示す。

手広遺跡第9層出土土器群(図9、表7) 第9層の土器出土量は微量で、破片を含めて総数200点弱にすぎない。形態・文様の観察に可能なものはさらに少なく20点弱である。器種構成は、深鉢形土器が全体の約75%、深鉢形土器が約6%弱に対し、壺形土器は約20%を占める。深鉢形土器が全体の約8割弱を占めるという器種構成の傾向は、サモト遺跡II層遺構出土の土器群と類似する。深鉢形土器はAの砲弾形が多く、しかも外器面には外耳が貼付される(1)。無文の深鉢形はV3の口縁を帯状に肥厚させるものである(2)。

壺形土器は、II4の口縁が肥厚せず立ち上がるもの(8)が1点と、口縁部の形態は不明であるが、肩部に沈線文を描くものが2点出土している。

浅鉢形土器で器形が復元できるもの(5)も出土している。浅鉢というより全体の形が三日月状を呈し、口端部には4つの隆起をもち、外器面には空中アーチ形の外耳を貼付している。

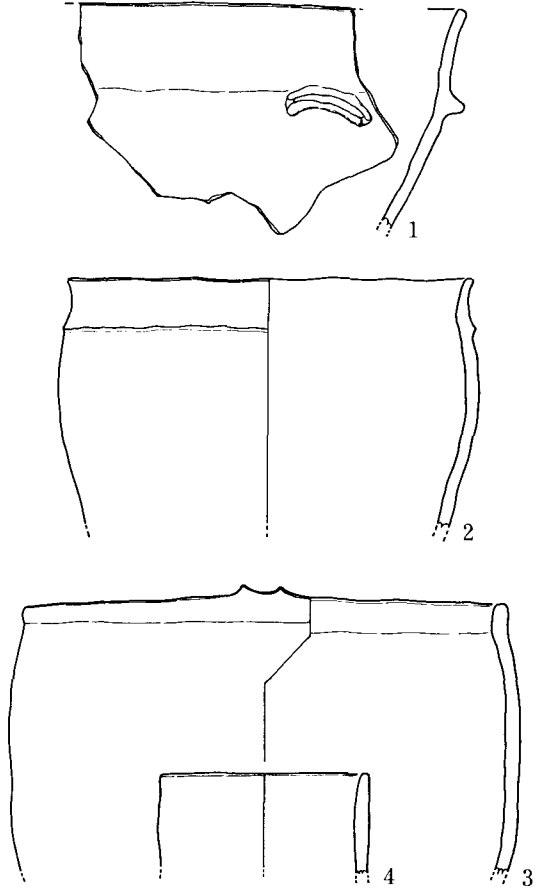
4 土器群の編年と器種構成

(1) 編 年 (図10)

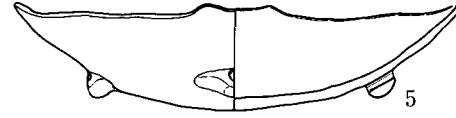
層位による遺跡の編年の項で分類した、第Iグループの手広遺跡第13層出土の土器群と、サモト遺跡III層遺構出土の土器群について比較してみたい。

両遺跡の深鉢A Iの貼り付け突帯と、その上部に施される文様には相違が認められるが、これは時期差と考えられる。手広遺跡第13層出土の大型のA Iの貼り付け突帯は2条で、口唇部と胴部にめぐらす。突帯上には横O字形の押し引きが多く施されており、突帯間に有軸羽状文が主として描かれる。一方、サモト遺跡III層出土の大型のA Iの貼り付け突帯も2条であるが、上部の貼り付け突帯は、口唇部から少しさがった口縁部に貼付される。突帯上部に施されるのは刻み目

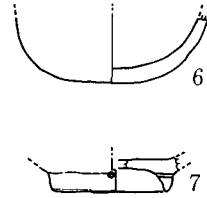
深鉢形土器



鉢形土器



底部



壺形土器

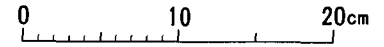


図9 手広遺跡第9層出土土器

か刺突のD字形で、突帯間に描かれる文様は綾杉文かまたは無文が増える。サモト遺跡でも、突帯上に横O字形の押し引きを施し、突帯間に有軸羽状文を描く土器は出土するが1点だけで、この文様モチーフは主流とはならない。つまり、大型深鉢形土器に施される突帯の位置と突帯上の文様、突帯間の文様について、上部突帯は口唇部にめぐらすものから、口縁部に、突帯上の文様は横O字形押し引きからD字形刻み目または刺突文に、そして突帯間の文様は有軸羽状文を古相とするという変遷を想定することができる。

以上のような突帯とその位置および文様の変遷過程は、タチバナ遺跡の土器にも反映する。タチバナ遺跡では、喜念Ⅰ式土器が発見されており、明らかに手広遺跡第13層土器群やサモト遺跡Ⅲ層遺構土器群より、後続するものと考えられる。しかしタチバナ遺跡の土器の一部には、手広遺跡第13層からサモト遺跡Ⅲ層遺構の土器群がたどった変容がさらに顕著な形となって現れる。すなわち、サモト遺跡Ⅲ層遺構から出土した深鉢AのⅢは、2条の貼り付け突帯をもつが、タチバナ遺跡出土の深鉢形土器は、口縁を三角形に肥厚させ頸部をさらに屈曲させるもの(5)や、突帯が1条だけのもの(6・7)に変容している。突帯上に施された刺突叉状竹管文は、叉状に分かれた両端部が三日月形になり、あたかも突帯の両わきに刺突列点文を施したようになっていいる。先行する土器の文様に比べ簡略化されたためであろう。この文様は、壺形土器に貼付される突帯上、または突帯両側に施される刺突列点文につながるものと推定される。深鉢形土器と壺形土器に施される文様には連続性が強く、特に頸部の屈曲が顕著な深鉢Bと文様等の変遷上で共通点が多いことを考え合わせると、壺形土器の形態は、深鉢形Bの頸部の屈曲化がより進んでいく途上で出現した可能性が考えられよう。

手広遺跡第13層の深鉢AⅠから、サモト遺跡Ⅲ層深鉢AⅠの変遷は、突帯貼付位置の口唇部から口縁部の移行、かつ口縁部の肥厚化という過程であり、また文様からみれば突帯上部に施される刻み目が、押し引き横O字形という基本理念から、刻み目または刺突のD字形へと移行する過程としてとらえられる。同様に考えることによって、サモト遺跡Ⅲ層の深鉢形土器とタチバナ遺跡の深鉢形土器の突帯文様の変化についても、説明することが可能である。タチバナ遺跡では屈曲形の深鉢の出現が、壺形土器の出現と連続しておこっており、それと呼応するように、深鉢形・壺形双方の突帯上の文様が刺突列点文となり、突帯も細くなるという変容が窺える。次にハンタ遺跡の位置づけについて述べてみたい。

ハンタ遺跡出土の深鉢形土器のうち、2条の突帯をめぐらすものには、突帯上にD字形の刻み目を施し、突帯間に綾杉文または沈線文を描くものと、1条の貼り付け突帯をめぐらす肥厚させた口縁部下端に直接刻み目を施すため、2条突帯と同様のように見えるものがある。突帯上の文様は、半裁竹管叉状工具による施文と、刺突列点文が同一土器上で同時に施文されているものもある。突帯間の文様は平行沈線文、綾杉文それに斜行沈線文を描くものが多い。また6号遺構からは、肥厚した口縁下端に刺突列点文を施し、その間に斜行沈線文を描いたⅣ(48)が出土している。突帯をもつ壺形土器は、細い突帯を縦横に組み合わせて貼付し、突帯の両側または上

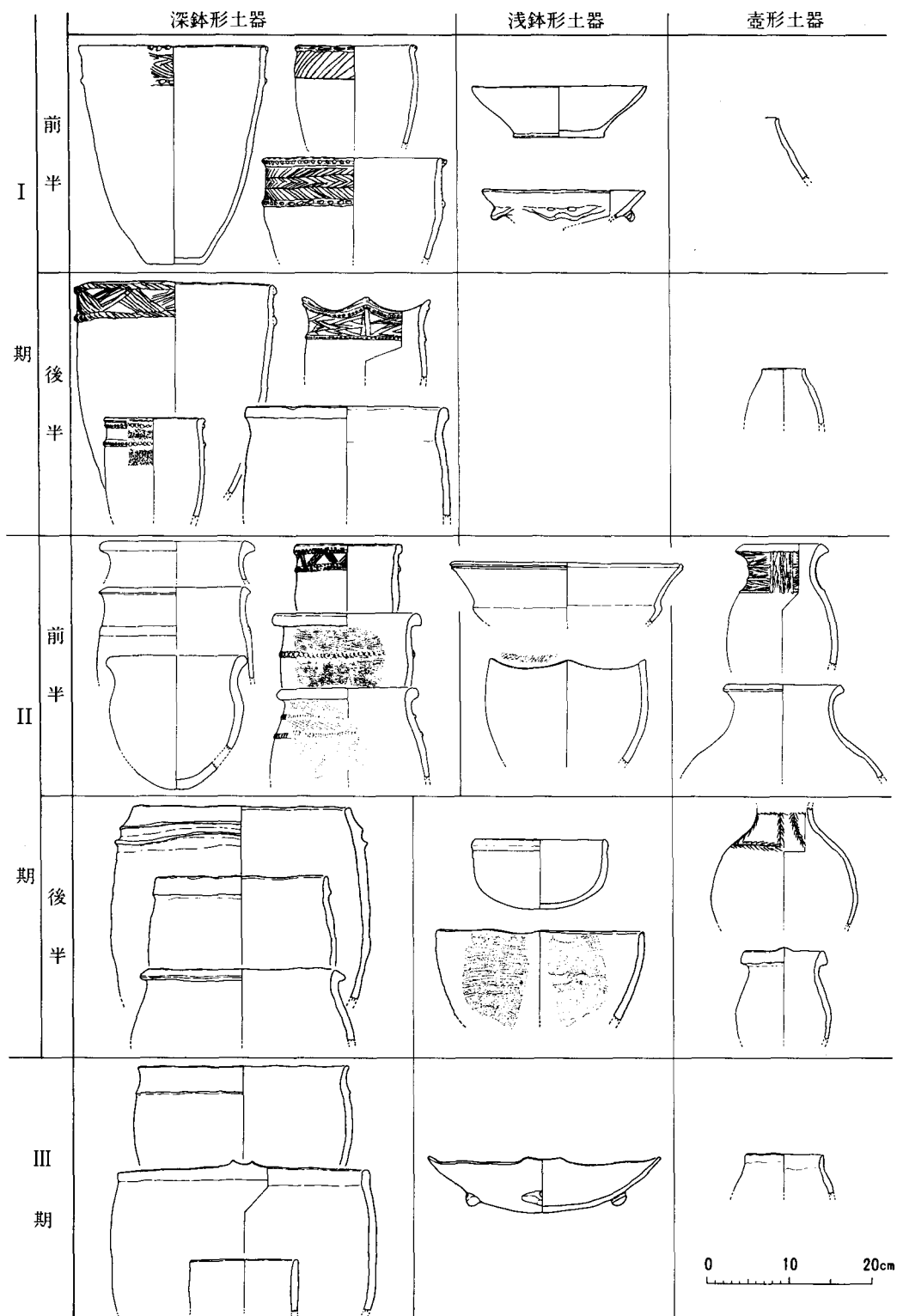


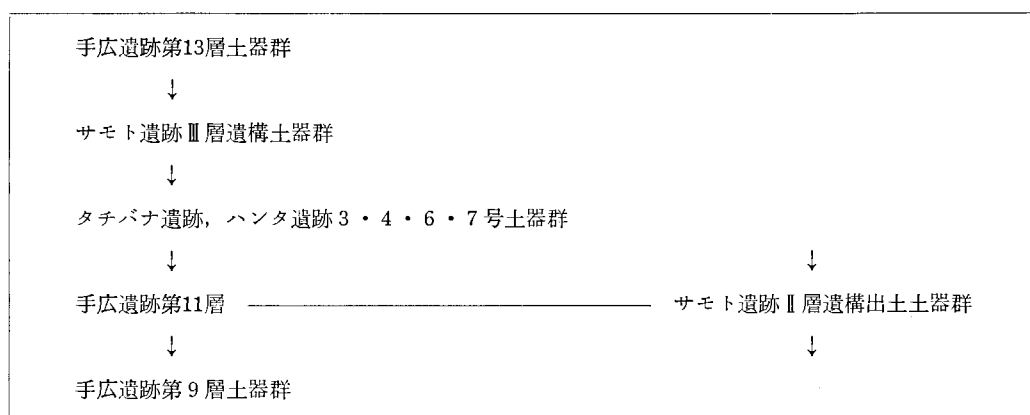
図10 土器編年図

を、刺突列点文で施文するものが多い。突帯間には綾杉文を描くものが多いが、突帯と刺突列点文だけを施し文様を充填しないものもある。突帯上の文様が刻み目から刺突文に変化している点、タチバナ遺跡と同様に貼り付け突帯と沈線による有軸羽状文を描く壺形土器が出土している点などから、ハンタ遺跡の3・4・6号遺構は、タチバナ遺跡とはほぼ同時期と考える。

手広遺跡第11層出土の壺形土器は、突帯上に刺突列点文を施し、そのあいだに綾杉文や沈線文を描くタイプのものも出土するが、さらに簡略化が進み、突帯を沈線に置き換えたタイプのものも出土している(29)。また突帯のみで、列点文も施さず文様も描かないもの(28)もある。明らかに、壺形土器上に施された突帯と沈線文が簡略化された結果であり、タチバナ遺跡のものより時期が下ると推定される。手広遺跡第11層の土器群は、タチバナ遺跡出土の土器群に後続するものと考えられる。

サモト遺跡Ⅱ層の出土土器は、深鉢形土器が約8割弱を占め、手広遺跡第11層とは異なった器種構成を示す。しかし、深鉢の無文化が進み、砲弾形Aの深鉢が姿を消す点、壺形土器の中に、突帯上に刺突列点文を施し、その間を綾杉文や沈線文で描くものが、極微量ではあるが出土する点、また突帯が簡略化され、沈線で表す文様をもった土器や、さらに突帯のみで列点文も施さず、文様も描かない土器が見られる点など、手広遺跡第11層出土の壺形土器の状況と類似する。サモト遺跡Ⅱ層出土の土器群は、手広遺跡第11層とそれほど時期的に差はなくほぼ併行すると考えられ、サモト遺跡Ⅱ層にみられた深鉢優位の器種組成は、時期差ではなく地域差としてとらえるのが妥当と思われる。

手広遺跡第11層とサモト遺跡Ⅱ層土器群が時期的に併行し、手広遺跡の層位関係より手広遺跡第9層出土の土器群が後続するものと思われる。壺形土器で文様は沈線に変化し、無文化がさらに進む傾向にある。以上の土器群の編年をまとめると、以下のようになろう。



このうち、タチバナ遺跡とサモト遺跡Ⅱ層から九州系の土器が出土し、時期の対比が可能である。タチバナ遺跡からは、黒川式土器と一湊式土器が、サモト遺跡Ⅱ層からは九州系の黒色磨研土器が出土している。従来縄文後期に編年されている面縄西洞式土器には、今回の分析では時期を判断できる九州系の遺物は共伴出土していない。上限は黒川式土器の前後であり、下限につい

ては、手広遺跡第5層で刻目凸帯付土器と夜臼系の丹塗磨研壺が出土しており、また同様なことは竜郷町ウフタ遺跡でも認められ、これが一応の目安となろう（熊本大学考古学研究室1982）。河口貞徳の編年によれば、面縄西洞式土器は、縄文後期併行期に位置づけられている。そのため、手広遺跡第13層とサモト遺跡Ⅲ層出土の土器群が縄文後期相当期の終わりに位置づけられる可能性もあるが、本稿では、手広遺跡第13層から手広遺跡第9層に編年的に位置づけられる土器群は、おおよそ縄文晩期併行期に包括した。ここで、これらの土器文化が展開したと思われる、縄文晩期併行期をⅠ～Ⅲ期に分期し、さらにⅠ期とⅡ期を前半と後半に分けてみたい。前述した土器編年をこの時期区分に当てはめてみると、手広遺跡第13層土器群とサモト遺跡Ⅲ層遺構土器群をⅠ期の前半と後半に、ハンタ・タチバナ遺跡と、手広遺跡第11層・サモト遺跡Ⅱ層遺構土器群はⅡ期の前半と後半に、そして手広遺跡第9層土器群はⅢ期に比定される。

従来、弥生時代中期に比定されていた、喜念Ⅰ式と、弥生時代後期の型式とされた宇宿上層式 a・b が、すでに縄文晩期にさかのぼることは、タチバナ遺跡の発掘調査以降、甲元眞之・上村俊雄によって既に指摘されている（甲元 1982, 上村 1986・1987）。河口貞徳は、縄文晩期併行期の型式として犬田布式土器を設定し、面縄西洞式土器と喜念Ⅰ式土器の中間型式としている（河口 1984）。本稿では面縄西洞式はⅠ期に比定され、前半と後半の2期に分期され、喜念Ⅰ式は、Ⅱ期の前半で、犬田布式と共伴して出土し、後半まで変容しながらも持続することになる。また、宇宿上層式 a の無文の壺のうち口縁断面が三角形を呈するものは、本稿分類の壺形Ⅱ 1 に、口縁の断面が蒲鉾形を呈する宇宿上層式 b は壺形Ⅱ 2 に比定される。この型式はⅡ期前半と後半にみられ、両者の出土比率は、タチバナ遺跡で 1 : 1.6, ハンタ遺跡で 1 : 2.8, 手広遺跡第11層で 1 : 1.3 となり、宇宿上層式 a・b 間の時期による出土状況の差は認められない。なお従来の型式と本稿における分期の対応関係をまとめてみると、以下の表ようになる。

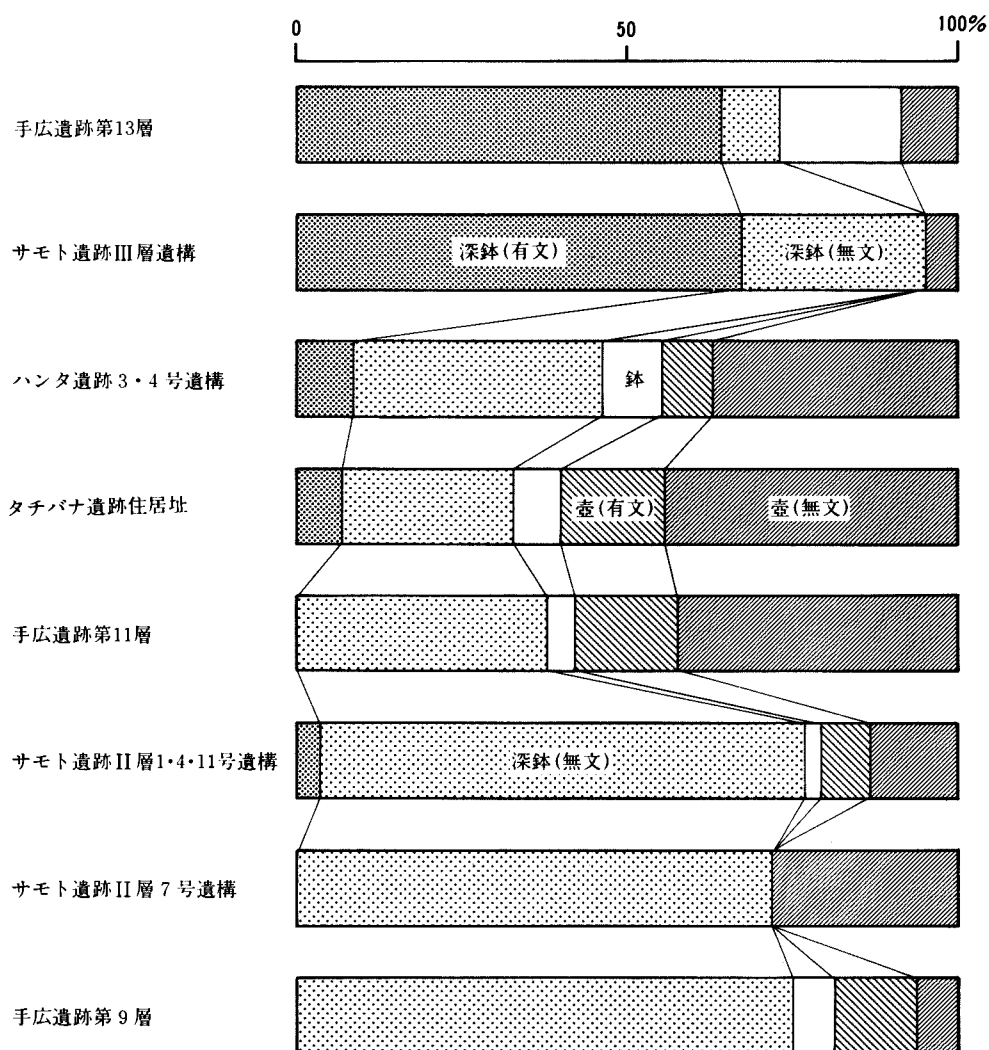
本稿での編年		従来の土器型式
Ⅰ 期	前 半	面縄西洞式
	後 半	面縄西洞式
Ⅱ 期	前 半	犬田布式, 喜念Ⅰ式, 宇宿上層式 a・b, カヤウチバンタ式
	後 半	カヤウチバンタ式
Ⅲ 期		カヤウチバンタ式

（２） 器種構成の変化（表 8）

Ⅰ期の器種構成 手広遺跡第13層の土器群とサモト遺跡Ⅲ層遺構の土器群の器種構成は、サモト遺跡で浅鉢が発見されていない点を除けば、深鉢が卓越し、しかも壺形土器の占める割合が低い点で共通している。また深鉢形土器には大型と小型の2種が存在し、これが用途による差である可能性が考えられる点も類似する。基本的な器種構成は同一と考えて問題ないとする。しか

表8 器種構成

遺跡名 \ 器形	深鉢 有文	深鉢 無文	鉢	壺 有文	壺 無文	計
手広遺跡第13層	7 (63.6%)	1 (9.1)	2 (18.2)	0 (0.0)	1 (9.1)	11
サモト遺跡Ⅲ層遺構	12 (66.7%)	5 (27.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.6)	18
ハンタ遺跡3・4号	5 (7.8%)	24 (37.5)	6 (9.4)	5 (7.8)	24 (37.5)	64
タチバナ遺跡住居址	11 (6.2%)	46 (25.8)	13 (7.3)	28 (15.7)	80 (44.9)	178
手広遺跡第11層	0 (0.0%)	48 (37.8)	5 (3.9)	20 (15.7)	54 (42.5)	127
サモト遺跡Ⅱ層1・4・11号	5 (3.1%)	119 (73.9)	4 (2.5)	12 (7.5)	21 (13.0)	161
サモト遺跡Ⅱ層7号	0 (0.0%)	20 (71.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (28.6)	28
手広遺跡第9層	0 (0.0%)	12 (75.0)	1 (6.3)	2 (12.5)	1 (6.3)	16



し、サモト遺跡では無文深鉢形土器に、Bの胴部が屈曲するタイプのものが新たな器種として加わっており、これは手広遺跡第13層土器群には存在しない。また、深鉢は手広遺跡第13層では有文が主であったのに対し、サモト遺跡Ⅲ層遺構では有文のものが卓越するものの、無文のものが出現する。器形における重要な相違は、サモト遺跡Ⅲ層遺構の土器群に、尖底気味の丸底が存在する点であろう。手広遺跡では平底の底部しか見つかっていない。

Ⅱ期の器種構成 タチバナ遺跡の器種構成は、深鉢形土器が全体の約32%、浅鉢形土器が約7%であるのに対し、壺形土器は約61%を占め、壺形土器が主流をなす。サモト遺跡Ⅲ層の土器群からタチバナ遺跡の土器への変遷過程で、最も注目されるのは、この器種構成の変化であろう。タチバナ遺跡に先行する遺跡では、平底の深鉢形土器が約9割を占めるのに対し、タチバナ遺跡では壺形土器が多くなり、壺形土器・深鉢形土器共に丸底化する。タチバナ遺跡におけるこれらの器種構成の変化は、この時期、生活様式に大きな画期があったことを想像させる。また注意しなくてはならないのは、タチバナ遺跡出土の壺形土器に、煮沸痕が認められることである。タチバナ遺跡出土の壺形土器は手広遺跡第13層・サモト遺跡Ⅲ層で出土した口縁が肥厚しない小型壺とは器形が異なっており、形態としては壺形土器に分類されるが、用途は貯蔵のほか、深鉢形土器と同様の煮沸用に使用された可能性が高い。

ハンタ遺跡3・4号遺構土器群の器種構成は、深鉢形土器が全体の約45%、浅鉢形土器が約10%弱に対し、壺形土器は約45%を占め、タチバナ遺跡より、若干壺形土器の占める割合が低い。

手広遺跡第11層の器種構成は、深鉢形土器が全体の約38%、浅鉢形土器が約4%に対し、壺形土器は約58%を占める。壺形土器が全体の約6割を占めるという器種構成の傾向は、タチバナ遺跡と共通する。深鉢形土器は、すべて屈曲形の深鉢Bで無文であり、有文のものは出土していない。土器の無文化が進み、Aの砲弾形は姿を消す。底部は、深鉢形・壺形土器共に丸底であろう。

サモト遺跡Ⅱ層の1号遺構出土土器の器種構成は、深鉢形土器が全体の約76%、浅鉢形土器が約3%弱に対し、壺形土器は約21%を占める。深鉢形土器が全体の約8割弱を占めるという器種構成の傾向は、タチバナ遺跡・手広遺跡第11層と異なる。また、同様にサモト遺跡Ⅱ層の2・7号遺構出土土器群の器種構成も、1・4・11号遺構のそれと共通しており、深鉢形土器が全体の約76%、浅鉢形土器が約3%弱に対し、壺形土器は約21%である。深鉢形土器は、いずれも屈曲形の深鉢Bで無文のものが大半を占める。底部の形態は、タチバナ遺跡・手広遺跡第11層と同様、深鉢形・壺形土器共に丸底と思われる。

Ⅲ期の器種構成 手広遺跡第9層の器種構成は、深鉢形土器が全体の約75%、浅鉢形土器が約6%弱に対し、壺形土器は約20%を占める。深鉢形土器が全体の約8割弱を占めるという器種構成の傾向は、サモト遺跡Ⅱ層遺構出土の土器群と類似する。しかし深鉢形土器は、無文の屈曲形の深鉢Bより、むしろAの砲弾形が多くしかも外器面に外耳が貼付されるという特徴を有する。壺形土器主体の器種構成が再度深鉢形土器主体へと変化するとともに、土器の無文化がいっそう進んだことを窺わせる。

以上より、各期の特徴をまとめてみよう。Ⅰ期前半は、平底の深鉢形土器主体の器種構成を示す。Ⅰ期後半は、平底深鉢形土器主体の器種構成を示しながらも、尖底気味の丸底の深鉢形土器、無文の深鉢形土器が出現する。Ⅱ期前半は小型丸底壺形土器主体の器種構成となる。Ⅱ期後半は、手広遺跡第11層では、依然として壺主体の器種構成を示すが、サモト遺跡Ⅱ層では、ふたたび深鉢主体の器種構成を示すようになり、この傾向はⅢ期の手広遺跡第9層の土器群に受け継がれる。では、Ⅱ期に突如として現れる壺形土器主体の器種構成は、どのような要因によって起こったのか。また、Ⅲ期にはなぜ再度深鉢形主体の器種構成へ変化するのだろうか。

5 器種構成変化の背景

以上、トカラ列島、奄美大島における縄文晩期併行期の土器について、編年と器種構成に焦点を当てて分析してきた。土器群を仮に3期に編年した場合、Ⅰ期からⅡ期にかけて、深鉢形土器の丸底化と、平底深鉢形土器主体から小型丸底壺形土器主体の器種構成という大きな変化が見られる。Ⅱ期の壺形土器は、Ⅰ期の壺形土器とは全く形態がことなるものであり、用途にも差があると推測された。またⅡ期前半からⅡ期後半は、手広遺跡第11層ではタチバナ遺跡の特徴である小型丸底壺主体と丸底の深鉢形土器という器種構成の特徴を引き継ぐが、ほぼ時期的に併行するサモト遺跡Ⅱ層土器群では、丸底深鉢形土器主体の器種構成へ変化している。そしてⅡ期後半に再度出現した深鉢形土器主体の器種構成は、後続するⅢ期の手広遺跡第9層の土器群へと引き継がれる。前述したように、Ⅰ期からⅡ期にかけての時期、奄美大島・トカラ列島において土器文化上、大きな画期が存在した。ではなぜ小型丸底壺形土器が主要になり、深鉢までもが丸底化するのか。そこには何か生産基盤の変化が存在したのだろうか。またこの変化は、この地域の中での内在的变化としてとらえられるのか、それとも外的な要因があったのだろうか。

弥生土器の出現にともなう、前代とのもっとも大きな変化は壺の出現であった。弥生時代の壺には、大型（高さ50cm前後）・中型（30～35cm）・小型（20cm前後）の例が知られている。そしてその用途は、貯蔵用と見なされてきた。佐原眞は靱を蓄えるだけでなく、液体や水ものの貯蔵に重点があったと考えた〔佐原 1976〕。また春成秀爾は「弥生時代の農耕祭祀発達とその性格を思い、特に大型・中型の壺は種籾保存用容器という性格がつよかったのではないかと推定している〔春成 1990〕。いずれにしても弥生時代の壺は、農耕生活との必然的な結びつきから、その用途は貯蔵用と考えられている。

新田重清は、沖縄諸島中心ではあるが、沖縄貝塚時代中期（縄文晩期併行期）農耕起源説を提唱している。この時期の遺跡が、畑作可能な台地上に立地すること、貝塚の形成が盛んでないこと、農耕具に関係すると思われる定角式石斧や片刃石斧が出土すること、そして農耕と関係するであろう壺形土器が比較的多く出土することを論拠にしている〔新田 1969〕。ところが、タチバナ遺跡やサモト遺跡等で出土した壺には、煮沸痕と思われるススの付着が認められるものがあり、

壺形土器のすべてとは断定できないが、壺が貯蔵用としての用途だけでなく、煮沸用としても使用された可能性が高いと推定される。しかもその大きさは小型で、底部は丸底である。形態は壺形土器であるが、用途からは貯蔵用のみに限定された弥生時代のものとは異質であると考えざるをえない。本稿であつかった地域のⅡ期の壺形土器は、深鉢形土器の形態から派生したものであり、壺の器面に施される文様の系譜が深鉢の文様に求められることはすでに述べた。煮沸用の深鉢形土器に描かれた文様と、煮沸用に使用された壺形土器に描かれた文様が、共通するという事実は注目されよう。

Ⅱ期の遺跡の特徴の1つは、その立地と遺構にある。Ⅱ期前半のタチバナ遺跡やハンタ遺跡は、台地上に立地しており、また堅穴住居址が発見されている。一方、Ⅱ期後半の手広遺跡やサモト遺跡は、砂丘上または砂丘の裏側に立地し、必ず後背湿地をもち、サモト遺跡では石組住居址を構築している。Ⅱ期の前半と後半に、遺跡の立地と住居址のあり方に差が存在することも問題になるが、程度の差はどうか、双方とも定住化が進んだことに間違いはない。そして砂丘上、または台地上の差を問わず貝塚を形成しないという点では共通している。さらにⅡ期の共通要素として石器組成が挙げられる。白木原和美は、この時期の石器を分析し、石斧は縦斧と横斧の区別が明確になり、しかも作りが入念で厚さを増すこと、石斧の中に、最後には植物繊維に関連する道具に転用されたものがあり、それは刃部がすり減らされていること、そうして石皿・磨石が増加することを挙げている。シイだけでなく大量の堅果類や根菜類の利用が可能になった故の現象であり、これらが定住化を引き起こし、根菜類の宝庫である砂丘の後背湿地から河川の開拓が重要になったと指摘している〔白木原 1992〕。たしかに、奄美大島のサモト遺跡と手広遺跡は砂丘上に立地し後背湿地をもつ。しかし同じく壺主体の器種構成となる沖縄諸島のこの時期の遺跡や、喜界島ハンタ遺跡やトカラ列島タチバナ遺跡は、台地上に立地しており、遺跡の立地からだけでは同一に論じられない。また、なぜ壺形土器が大量に必要であったのか、Ⅲ期の遺跡の立地は、Ⅱ期後半と同様に背後に湿地をもつ砂丘上に立地するのに、なぜ再び深鉢形土器主体の器種構成に変化するのか、そしてなぜ深鉢までもが丸底化するのかについての合理的な説明は今のところみあたらない。

いずれにしても小型丸底壺形土器と丸底深鉢という器種構成が出現する背景には、遺跡の立地の変化・定住化・石器組成の変化等からみて、生産基盤上に何か大きな画期があり、それが器種構成の変容と関連していることは確実であろう。Ⅱ期の壺形土器主体の器種組成を育景とする生活様式が短期間のうちに、なぜ衰退するのかという問題に対しては、現時点では推定の域をでない。ただ指摘しておきたいことは、このⅡ期における変化を、壺形土器を主体とする器種構成、石器組成をメルクマールとしてみると、九州縄文時代晩期の土器文化との直接的な関係は認めたい。たしかにタチバナ遺跡で九州系の搬入土器が出土しているが、器種構成は壺形土器が主体であり、器種構成が反映しているとおもわれる食生活様式では奄美大島と共通する。石器組成も九州本土の同時期のものと共通する点はあるもののやはり異質である。

沖縄諸島貝塚時代中期は、奄美の縄文晩期併行期に相当する。中期の特徴は、貝塚を形成せず、シヌグ堂遺跡のように集落址を形成し、壺形土器が急増するなど、奄美諸島の変化と一致する。すると、九州からのインパクトではなく、南からの大きな流れの上にこの動向がおこっているのか。この地域の縄文晩期併行期の画期を探るためには、さらに沖縄諸島以南の南海地域や大陸からの影響も視野に入れる必要があるのか。いずれにしても、島ごとの土器編年の早急な確立と土器以外の文化の諸要素間の関係を、南西諸島内で時期ごとに再構築し総合的にとらえる必要があらう。

(1992. 10. 31)

謝辞

私が初めて遺跡の発掘に参加したのは、1979年のトカラ列島中之島タチバナ遺跡の第3次調査であった。この機会に、考古学を勉強するきっかけと、本稿をまとめる動機を与えて下さった熊本大学の白木原和美先生・甲元眞之先生、笠利町歴史民俗資料館の中山清美氏、それに本稿を書くにあたりご教示と刺激を与えて下さった当館の春成秀爾先生・設楽博己氏・藤尾慎一郎氏に心からお礼を申し述べたい。

註

- (1) 九州以南島嶼をさす言葉として、「南島」の名が一般的に使用される。「南島」とは元来、律令国家にまつろわぬ化外の民の地域をさす。7世紀には種子・屋久島以南をさすが、8世紀初頭之多禰国設置以後は、奄美以南に限られる〔安里 1987〕。また、「琉球列島」は、奄美諸島を除く沖縄諸島以南をさす地域名称であるのに対し、「琉球」は、琉球王朝の支配した地域、すなわち北はトカラ列島以南から南は与那国島までを含む場合が多い。本稿で使う「南西諸島」は、薩南諸島以南先島諸島までを含む地理的概念として使用する。
- (2) この北部・中部・南部文化圏は、国分直一が土器文化から設定したものである〔国分 1966〕。
- (3) 「琉球列島ハ、本土及台湾トノ連鎖ヲナセルヲ以テ、本土ニ遺跡ヲ遺セル諸民族ノ南方トノ間ニ一交通路ヲ形成セル為…」
- (4) 徳之島の考古学的調査は1928年が最初で、広瀬祐良が面縄貝塚を発掘し、その発掘史料を山崎五十磨が「考古学雑誌」に発表している〔山崎 1930〕。小原一夫は面縄第一貝塚を調査し〔小原 1932〕、また大山柏と共に第二貝塚も調査している〔大山 1933〕。1935年には三宅宗悦が面縄第一・二貝塚、それに喜念貝塚の試掘を行っている〔三宅 1940〕。
- (5) 大山は1922年に発表した伊波貝塚の報告で、沖縄諸島の考古学的研究には「本島ト内地トノ中間ニ横ハル諸島其他ノ研究ノ行ハレ、以テ其関係ヲ一層明ニセラレンコトヲ希フモノナリ」と奄美諸島の研究の重要性をすでに述べている〔大山 1922〕。
- (6) 「編年にあたっては、沖縄地方の日本文化における特殊性を考慮し、地域にマッチした独自の編年を志向すべきだと考えるが、残念ながら、縄文中期および弥生前期に対比される時期が不明のため、現時点での独自性を加味した編年(時代区分)は困難である。しかし、もし将来、固有化への過程が押さえられるなら、その段階では、たとえば縄文期、形成期、固有感といったような3時代区分も一つの方法であり、…また、弥生前期あるいは中期文化が確認された時点では、前述の単系変化とは異なった時代区分を考えるべきであろう」と述べている〔高宮 1978〕。
- (7) 九学会の考古班は、1955年に奄美大島の宇宿貝塚、1956年に徳之島の面縄兼久浦地方、1957年には奄美諸島の概括的な調査をおこなっている。
- (8) 宝島の大池遺跡は1973年国分直一らによって発掘調査された。遺物は現在整理中である。
- (9) 河口貞徳は、その後資料の増加にともない、編年を修正している〔河口 1984〕。縄文後期相当期から弥生時代相当期にかけての編年の中で、面縄東洞式→嘉徳Ⅰ式→嘉徳Ⅱ式→面縄西洞式を縄文後期に比定している。縄文晩期相当期は、犬田布遺跡の土器を標識とし新たに犬田布式土器を設定し、この時期に比定させている。また、喜念Ⅰ式は弥生時代中期に、宇宿上層式 a・b は弥生時代後期に相当するとしている。
- (10) 笠利半島の東岸は、遺跡が密集していることで有名である。高又・喜子川・港・宇宿・用・下山

- 田・アヤマル・ヤーヤ・長浜兼久遺跡等が挙げられる。
- (11) 深鉢形土器の大型・小型ともに、器高が復元できるものは非常に少ない。
 - (12) すでに述べたように、完形土器が少ないため、口縁部と底部の形態の把握は、少数の完形品と一括土器群から類推するしかない。そこで分類には底部をくわえていない。
 - (13) 又状に分かれた工具は、押すかまたは刻んだ痕が弧状を示し、また引いた痕が蒲鋒状に膨れることから、小竹を割ったものである可能性が高い。

引用・参考文献

- 安里 進 1987 「琉球—沖縄の考古学的時代区分をめぐる諸問題」『考古学研究』34—3。
- 伊仙町教育委員会 1984 『大田布貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書2。
- 牛島盛光 1964 『宝島大池遺跡の調査概報』(西日本史学会発表)。
- 大山 柏 1922 『琉球伊波貝塚発掘報告』。
- 大山 柏・小原一夫 1933 「奄美大島群島徳之島貝塚出土遺物—面縄第二貝塚伊波式土器の研究—」『史前学雑誌』5—5。
- 鹿児島県教育委員会 1985 『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32。
- 1986 『ケジⅠ・Ⅲ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書38。
- 1986 『泉川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書39。
- 1987 『長浜金久(第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡)』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書42。
- 1988 a 『長浜金久(第Ⅱ遺跡)』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書46。
- 1988 b 『土浜ヤーヤ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書47。
- 1988 c 『下山田遺跡・和野トフル墓』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書45。
- 笠利町教育委員会 1986 『城遺跡・下山田遺跡・ケジⅢ遺跡』笠利町文化財調査報告8。
- 金閔丈夫 1955 「八重山群島の古代文化」『民族学研究』19—2。
- 上村俊雄 1984 『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究』鹿児島大学文学部考古学研究室。
- 1986 「一湊式土器の編年の位置について」『南島考古』10, 沖縄考古学会。
- 1987 「喜念Ⅰ式土器の編年の位置について」『東アジアの考古と歴史』岡崎敬先生退官記念事業会。
- 河口貞徳 1959 a 「奄美大島の先史時代—Ⅴ 徳之島の遺跡 3 喜念貝塚—」『奄美 自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査委員会編。
- 1959 b 「奄美大島の先史時代—Ⅳ 徳之島面縄第4貝塚調査報告—」『奄美 自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査委員会編。
- 1974 「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』9, 鹿児島考古学会。
- 1978 「サウチ遺跡」『鹿児島考古』12, 鹿児島考古学会。
- 1981 「市来式の祖形と南島先史文化への影響」『鹿児島考古』15, 鹿児島県考古学会。
- 1982 「奄美列島の文化」『縄文文化の研究』6, 雄山閣。
- 河口貞徳・上村俊雄・多々良友博・平島勇夫 1974 「嘉徳遺跡」『鹿児島考古』10, 鹿児島考古学会。
- 河口貞徳・出口 浩・本田道輝 1979 『宇宿貝塚』鹿児島県笠利町文化財調査報告書。
- 岸本義彦 1991 「南島の土器起源をめぐって—爪形文土器についての一考察—」『奄美考古』2, 奄美考古学研究会。
- 金武正紀・比嘉春美 1985 『シヌグ堂遺跡』沖縄県文化財調査報告書第67集, 沖縄県教育委員会。
- 熊本大学考古学研究室 1978 『高又遺跡』研究室活動報告3, 熊本大学考古学研究室。
- 1979 『タチバナ遺跡』研究室活動報告4, 熊本大学考古学研究室。
- 1980 『タチバナ遺跡(2)』研究室活動報告7, 熊本大学考古学研究室。
- 1982 『ウフタ遺跡』研究室活動報告12, 熊本大学考古学研究室。
- 1983 『サモト遺跡(1)』研究室活動報告17, 熊本大学考古学研究室。
- 1984 『サモト遺跡(2)』研究室活動報告18, 熊本大学考古学研究室。
- 1986 a 『手広遺跡(概報)』研究室活動報告20, 熊本大学考古学研究室。
- 1986 b 『ハンタ遺跡—付 喜界島遺跡分布調査—』研究室活動報告21, 熊本大学考古学研究室。
- 甲元眞之 1982 「トカラ列島の文化」『縄文文化の研究』6, 雄山閣。

- 国分直一 1959 「奄美大島の先史時代Ⅱ 宇宿貝塚周辺の遺跡と遺物 3 ナビロ川沿岸の遺跡Ⅰ」『奄美 自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査委員会編。
- 1966 「南島の先史土器」『考古学研究』13—2。
- 1968 「南島先史時代の技術と文化」『史学研究』66, 東京教育大学文学部。
- 1972 『南島先史時代の研究』慶友社。
- 1976 『環シナ海民俗文化考』慶友社。
- 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨・原口正三 1959 「奄美大島の先史時代」『奄美 自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査委員会編。
- 国分直一・野口義磨 1959 「奄美大島の先史時代Ⅲ 面縄第2貝塚調査報告」『奄美 自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査委員会編。
- 国分直一・三島 格 1965 「ヤブチ式土器—琉球と奄美大島における文化交流の一証跡—」『水産大学校研究報告人文科学篇』10。
- 小牧実繁他 1927 「那覇市外城嶽貝塚発掘報告」『人類学雑誌』42—7。
- 佐藤伝蔵 1896 「屋久島の石斧」『人類学雑誌』11—123。
- 佐原 眞 1976 『弥生土器』日本の美術125, 至文堂。
- 島田貞彦 1932 「琉球崎樋川貝塚」『歴史と地理』30—5。
- 白木原和美 1969 「徳之島の先史学的所見」『南日本文化』3。
- 1970 「先史時代」『徳之島町誌』。
- 1971 「大島郡笠利町の先史学的所見」『南日本文化』4。
- 1974 「奄美先史学の当面する諸問題」『琉大史学』6。
- 1976 「大島郡伊仙町の先史学的所見」『南日本文化』9。
- 1987 「喜界島の半田の住居址」『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と古代』岡崎先生退官記念事業会, 同朋舎出版。
- 1992 「琉球弧の考古学—奄美と沖縄諸島を中心に—」『海と列島文化』第6巻, 小学館。
- 曾野寿彦 1959 「奄美大島の先史時代Ⅰ 奄美大島笠利村宇宿貝塚発掘調査報告Ⅰ」『奄美 自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査委員会編。
- 高宮広衛 1961 「沖縄本島の先史文化—概観—」『沖縄文化』4, 沖縄文化協会。
- 1975 「考古学」『沖縄市』文化1, 沖縄県教育委員会。
- 1978 「沖縄諸島における新石器時代の編年試案」『南島考古』6, 沖縄考古学会。
- 1983 「暫定編年の第二次修正について」『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科篇』11—1。
- 1984 「暫定編年(沖縄諸島)の第三次修正」『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科篇』12—1, 沖縄国際大学文学部。
- 1988 「嘉徳Ⅰ式A式土器」『永井昌文教授退官記念論文集 日本民族・文化の生成』永井昌文教授退官記念論文集刊行会。
- 高宮広衛・知念 勇 1977 『渡具知東原』読谷村文化財調査報告書3, 読谷村教育委員会。
- 高宮広衛・仲宗根求・宮里信男 1987 「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報」『沖国大考古』9, 沖縄国際大学文学部考古学研究室。
- 竜郷町教育委員会 1979 『手広遺跡発掘調査終了報告』竜郷町教育委員会。
- 竜郷町教育委員会・奄美考古学会 1984 『手広遺跡—大島郡竜郷町手広遺跡発掘調査概報—』竜郷町教育委員会・奄美考古学会。
- 谷川健一編 1971 「起源論争」『わが沖縄』3, 木耳社。
- 田村見一・中山清美 1989 『喜子川遺跡』喜子川遺跡調査団。
- 多和田真淳 1956 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『1956年版文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会。
- 知念 勇 1991 「沖縄考古学の開始から編年の確立まで」『新版古代の日本③九州・沖縄』角川書店。
- 角田文衛 1937 「上代の種子島—日本文化の南限に就いて」『歴史と地理』69—1。
- 当真嗣一 1985 「沖縄の時代区分をめぐる一とくに弥生相当期からグスク時代—」『考古学研究』32—2。
- 鳥居龍蔵 1894 「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」『人類学雑誌』9—94。
- 1904 「沖縄諸島に住居せし先住民について」『東京人類学会雑誌』20—227。

- 中山清美 1988 「面縄前庭式土器」『永井昌文教授退官記念論文集 日本民族・文化の生成』永井昌文教
授退官記念論文集刊行会，六興出版。
- 1991 a 「奄美諸島の先史時代文化」『新版古代の日本③九州・沖縄』角川書店。
- 1991 b 「奄美大島における爪形文土器」『奄美考古』2，奄美考古学研究会。
- 永井昌文・三島 格 1964 「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」『考古学雑誌』5—2。
- 春成秀爾 1990 『弥生時代の始まり』UP 考古学選書11，東京大学出版会。
- 新田重清 1969 「最近の沖縄における考古学界の動向」『琉大史学』1，琉球大学史学会。
- 藤本 強 1988 『もう二つの日本文化—北海道と南島の文化—』UP 考古学選書2，東京大学出版会。
- 松村 瞭 1920 『琉球荻堂貝塚』東京帝国大学理学部人類学教室研究報告第三編。
- 三友国五郎・河口貞徳 1962 「宝島浜坂貝塚の調査概要」『埼玉大学紀要 社会科学篇』11。
- 三宅宗悦・藤岡謙二郎 1940 「徳之島出土の貝塚土器に就いて」『考古学』11—5。
- 三宅宗悦 1940 「南島の先史時代」『人類学・先史学講座』16，雄山閣。
- 若林勝邦 1892 「種子島及び大島の石斧」『人類学雑誌』7—71。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

The Amami Islands in the Period Corresponding to the Final Jōmon Period

NISHITANI Masaru

The author, in this paper, deals with the period corresponding to the Final Jōmon period in the Tokara Islands and Amami Ōshima Island, part of the cultural sphere of the Nansei Island group, identifying the chronology of the pottery and analyzing the make-up of vessel types, in order to examine the background to changes in these.

The author set out a new classification for pottery and established chronology using pottery excavated from structural remains or well-defined cultural layers. Thus, he divided the period corresponding to the Final Jōmon period in this area into Periods I to III, and further divided Periods both I and II into Early and Late. Pottery excavated from the 13th layer of the Tebiro Site was attributed to Early Period I: that from Layer III of the Samoto Site to Late Period I: that from the Hanta and Tachibana Sites to Early Period II: that from the 11th layer of the Tebiro Site and the 2nd Layer of the Samoto Site to Late Period II: and that from the 9th layer of the Tebiro Site was attributed to Period III.

The make-up of vessels in each period is characterized as follows. Vessels of Early Period I were mainly flat-bottomed and deep-bowl type pottery. Those of Late Period I, while retaining the features of Early Period I, differ in respect of the appearance of slightly pointed-based, round-bottomed shapes and unpatterned deep-bowl type pottery. In Early period II, the main vessel type shifted from deep-bowl type pottery to small, roundbottomed jar-type pottery, and both types showed round bottoms. Vessels from the 11th layer of the Tehiro Site, belonging to the Late Period II, were mainly small, round-bottomed jars, while those from the 2nd Layer of the Samoto Site were mainly deep bowls, again. This trend is also shared by pottery excavated from the 9th layer of the Tehiro Site, attributed to Period III. In this way, it can be pointed out that the composition of vessel types underwent great changes from Periods I to II, and from II to III.

Behind the appearance in Period II of vessel types that were mainly small, round-bottomed jar-type pottery, changes in the location of sites, the tendency to settle, and an increase in the number of stone tools used for processing food may be observed. It may be supposed that there was probably an epochmaking change in the production base of this period, which was reflected in the pottery culture. It may be considered that detailed clarification of the life style backed by the vessel types composed mainly of jar-type pottery, and the setting of the question of why the composition of vessel types changed rapidly back to deep bowls in such a short period of time, would seem to lead to an explanation of the primary factors leading to social changes in this period, which probably lie behind the change in vessel types.